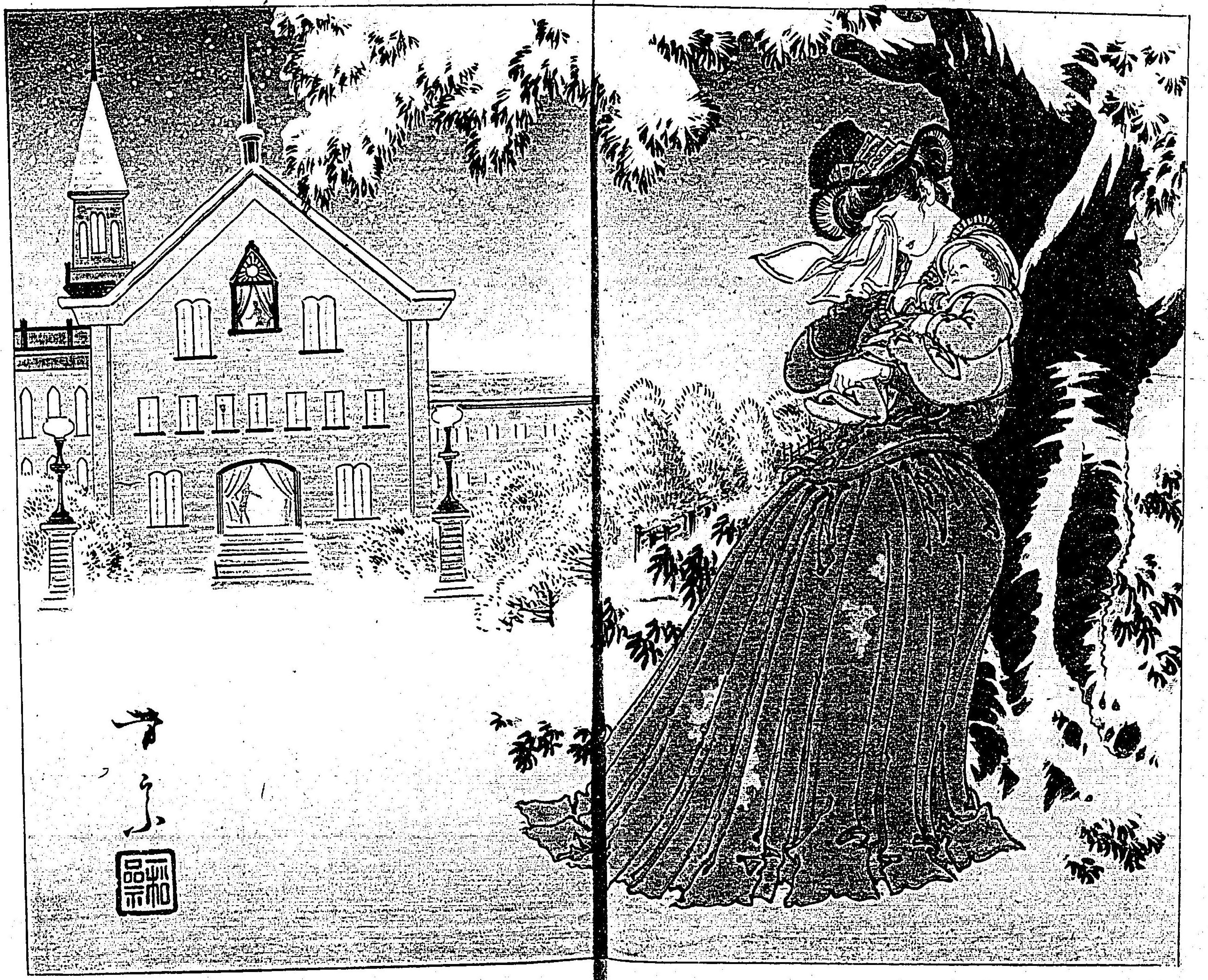
特 8
387

淚美人

序

凡そ世乃中に小説ほど書き易きものはあらじ、何故なれは普通の人情ハ、人皆な生れながらにして之れを有てはなり、既に己れの身之れを諳ず、而して筆紙墨の紹介を得て他人の知感に移すこと、若し漢字を知らざるものハ假名字に、之れなど容易き仕事ハ無からずや、實にころ近代ハ文學などてふ金看板を揭げて、甲も乙も太郎も次郎も、貴とき時と紙とを潰して長短万種の小説を物し、可惜金錢を新聞の廣告に棄て、由縁も無き大言を吐き散らそもの、夥多しきも罪無けれ、去れど其行末の命は如何に、多くは之れ洋衡の厄介、駄本の入紙と成り下るもの、惟へは實に不可思議の、次第ならずや、吾れ念じて玆に至る毎に、眞乃小説ほど物し難きハ無く、眞の小説の物し難きハ之れ天の鑑識なるを感ぜぬハ無く、大家の遺墨を繙ひて徐ろに其人を敬ふの心を起さぬハ無きなり、吾は夫れ斯の如く眞乃小説の編み難きを知る、既に其難きを悟るの吾れ、如何に感奮すればとて幾百斤の筆紙を空ふすればとて、爭で塵界乃人情を觀破して其妙所に

5609



突入り、讀者をして快平の裡に卷を結ばしむる如き業の爲し得らる可き、吾れ亦たこれを知らざるにあらず、而かも知つて尙は小説を物せんと欲するの念を斷つ能はざる、抑も之れ如何なる因果ぞや、人は稱して吾の病なりといふ、洵とに然り、病年久ふして今は痼疾と成り、小許の藥劑は以て之れを治すること能はざるに至りぬ、況んや吾れの病一種の特徴あり、遠く耶蘇教國の人情を寫して、之れを吾が神國の人の知感に移さんと望むをや、吾れ此難中の難路を歩して病頗ぶる威を滅し、其快よきこと譬へん物無し、初め六月十八日を以て稿を起し、爾來二週日、日曜日と朝夕の運動時間を除かば、正味十日に足らぬ端した時間、玆に涙美人の一篇を成す、試みに寫字生に就いて之れを諮はゞ、技量の巧拙は問ふに暇なからん、而かも讀者卷を披いて哀涙滴々、潸然として書を潤殺するを悟らざれば豈に唯だ書肆の幸のみならんや、

譯者醉志

特8
387

涙美人

丸亭素人

第一回

薔薇の匂へる一室の中に唯だ一脚の卓子を友とし力無く前に垂れたる頭を兩の掌に受け支へて最とゞ物思はし氣に打ち萎れ居る一人の美人あり、折柄廊下を歩む足音高く此の室に入り來りし年齡の頃二十年餘りと覺しき美男子にて思ひに惱める美人の後姿を見るより遽だしく詞を掛け「花子さん只今……」と言ふ聲聞いて美人花子は飛び上りさま此方を振り向き 花「オヤ春雄さん能くお歸り成さつて下さいました」と互に手を握り顔を見合せし時は、今まで無量の愁に惱みし美人花子も滿面喜び

の色を浮べて俄かに一層の美を加へぬ、春「私の留守中は獨りで定めし退屈成さつたであらうネ」花「退屈の退屈で無いのと言つて夫りや最うお話に成り升せん此の三日斗りといふものは淋しさが通り過ぎて終つて神經病でも起しそうでムい升した」春「實に左樣だろうと思つて私しも氣が氣ぢや無かつたけれども……ゝ兎に角歸つて來たのですから最う其んな悲し氣なお話は止め升せう又々色々話し度い事もあり升すから此方へ出で成さい」と言ふ春雄が聲の中には表面にこそ現はさねども内心無量の苦みを湛え居ると知られたり、花子は親にも代え難き春雄に逢ふことの嬉しさに仔細の事には氣も付かぬ手を曳かれつゝ共に長椅子に腰打ち掛けて花「又た此んな事を申したら貴方が御立腹成さるか知り升せんが何故妾共は此んなに不幸

な人間でムい升せう」春雄は故らに笑を含んで春「何が夫んなに不幸なんですか」花「何が夫んなにッて妾共程不幸なものは無いぢやあり升せんか能く考へて御覧成さい始終貴方は何處へか入らしつて宅に出で成さるのはホンの指を折つて數へる程しかあり升すまい其間妾が獨りで此處に留守を致して居る苦みは何の位だか知れや致し升せん男は何うかも存じ升せんが世の中に女と生れて來て自分が本夫と賴む人に別れて居るほど苦しい事は有りや致し升せん」春「夫りや男子だつて女子だつて其通の人情に異る所は有り升せんが併し左樣成るも持つて生れた運命だと思つて諦めるより外は無からうネ」花子は此詞の心に掛つてか少しく面色を變えて花「貴方が左樣仰有ると何う致しても聞か無いぢや置かれぬ事が有り升すが之れから後も今まで

のように斯んな惡い運命に付き纒はれて遁れる事は出來升まいか」と花子の問ひ詰めし一言に春雄は宛かも刃もて胸を刺さるゝ思を爲せしが、其面色を悟られじと片手を額に押し當て差し俯向き春「ナニ夫んな馬鹿な事があるものですか今日の苦しみは乾度明日の樂みと成り升すから決して心配し成さるナ何時まで此んな境遇が續くもんですか夫んな事斗り考へて居た分にや人間は生きて居られやし升せん」花「妾だつても左樣思はぬ事は有り升せん大抵の事は何時も左樣思つちや諦めて居升すけれども時に依つては何う致ても心配仕無いで居られ無い事があり升すもの」春「夫れぢや貴孃が私を信じ無いのだ今ま始めて言ふのぢや無いでせう今まで幾度左樣言つたか知れ無い事を何うも疑はしい何うも心配だと言はれて見りや私が貴孃

を思ふほど貴孃が私を思は無い精だろうと言ふより外に致方が無いナ」春雄が少しく冷淡の詞に花子は疾く狼狽の樣子花「何か言ふと直きに貴方は御腹立成さるけれども此んな心配話を致るのは決して貴方の心を疑つての事ぢやあり升せん何うか一日も早く此んな處を出て終ひ度いと思へばこそ朝晩に心配もし苦勞も爲るんぢや有り升せんか」春「ですからサ初めに貴孃が私に約束した事があるでせう私の致る事には些とも疑を抱か無い其代り私は貴孃を妻として世の中に披露の出來るよふに出來る丈け早く郷國へ歸つて貴孃のお父上さんへ人を以て結婚の承諾を求める方法に就いて計畫するから此約束さへ本心で背か無けりや今に成つて貴孃が私の出て往くのを左樣クヨクヨ心配し無くても宜いぢやあり升せんか」此時花子孃は

再び打ち毀れて両眼に涙を浮べ花「妾の本心は決して其約束に反き〼せん又た貴方が出て往き成さるのを悪いとも疑はしいとも思ひ〼せんケレども貴方も豫て承知の那の花本の夫人さんが何う致てか妾の此處に居ることを知つて此間長い手紙を寄越したのを讀んで見〼すと妾の家を出て居ることに就いて色々な事が書いて有り〼したんで妾は最う身を切られるよふな心持が致し〼した夫や此れやを考へてツイ思は無くても宜い事を思つたり言は無くても宜い事を言つたり致すんで厶り〼すから決してお腹を立てゝ下さい〼そナ」花本夫人の手紙と聞いて春雄も少しく打ち驚き春「花本夫人が何んな事を言つて寄越し〼したか」花「夫人の言ふには妾が家を出て居るのは何うも通常事でないと思はれるが世間には色々な噂が立つて居て

妾は怪しい二人の紳士と手を捉り合つて出奔したのだといふ説が多いから万々信じられぬ風説ではあるけれども自分が妾を教育して居た勤務の上から致ても是非其事を確めてお父上さんへ申上げ無くちや成らぬと永々しく書いており〼した」流石に春雄も此の事を聞き双手を組んで姑し思案に沈づみし後ち春「アヽ矢張り考へて見ると私が悪い花子さん何うぞ勘忍して下さい世間の奴等にまで何だの蚊だのと言ひ囃されて定めしお父上さんもお腹立でおろうケレどもチ何時までも此んな日影ものでは活さぬから此苦みの反動に乾度愉快な日を迎へる事が出来〼す何うぞ今ま姑らく忍耐して居て下さい」花「夫りや貴方妾は何時までゝも此苦みに堪へる了見で居り〼すケレども最う此後は妾を獨り此處へ殘してお出掛け成さるよ

ふお事は無いでムい升せう」と問はれて春雄は詞無く姑しは默然として居たりしが、假令へ一時は花子をして其場に倒れ泣き伏すほどの深き嘆きに沈ましむるも其目前の愛惜に惑れされて後の幸福を誤るに忍びずと春雄は聽て決心の面色にて春「花子さん私の言ふことを最う一度聞いて下さい貴孃の詞を待たんでも私しや決して出て往き所ろはあり升せんケレども目前の小愉快の爲めに一生涯の大快樂を失ふに忍びんからと思へばこそ思を殘して出て往くのです私が貴孃を殘して出て往かぬように成るの日は取も直さず貴孃と私が結婚するの日です今日でも兩人が夫婦に成れる丈けお方法さへ立つて居ることなら此んな田舎の淋しい處に居るにや當らんのだけれども悲しい哉未だ其運びに至らないから最う一度私は貴孃を殘し

て置いて出無くちや成り升せぬ併し……」と言ひ續かんとするを遮りて花子は涙に聲を曇らし花「夫れでは何うぞ妾も一所にお連れ成さつて下さい升せ春「一所に往つて宜い事なら今までも殘しちや往かないんですが貴孃が居ては折角企てた私の計畫が破れて仕舞ひ升す仔細は後で分ることだから暫時此處で辛胞して居て下さい代りに私が平素信用して居る友人で糟谷勇次といふのが此村に居升すから其人へ萬事貴孃の事を賴ん、で置いて折々此處も見廻らせるよふお事に致て置く積りですから必らず心配せずに私の歸つて來るのを待つて居て下さい今まで辛胞して來たものを今に成つて貴孃が何だの蚊だのと言ひ出しては折角苦しんで計つたことが皆んな水の泡に成つて終ふのですから何うぞ今ま姑らくの處、獨りで此處に居て下

さい此の通り頼み升す」と春雄は手を合せて伏し拜みぬ花子は長椅子の上に打ち倒れて泣き入りし儘ま暫かに詞も出でざりしが稍やありて顔を上げ花「そして今度は何時御出立に成つて何方へお出でに成るので厶い升す」春「サア夫が殆ど、早急に迫つて居るので遅くも今晩出立せねばや成り升せんシテ往く先は南地の方です」唯だ南地と計りにて其地名さへ教へぬのみか如何ある計畫ありやとも更に知らさぬ春雄が心は果して多情乎又た無情乎一度び其心に入らざるもの〻知る由無きは勿論なれども春雄の身に潜める此秘密は花子が爲めには胸の群雲、片時霽るゝ暇まも無ければ又も打ち伏して泣き沈める折しも廊下の方に靴音の聞へて何ものか二人の室に入り來る樣子に春雄は起き直り、て正しく椅子に腰打ち掛け花子は流るゝ涙を拂

ひて泣顔裝ひ待つ間も無く遠慮も無く入口の戸を開いて入り來りしは春雄が友人糟谷勇次なり糟「イヤ春雄君誠とに御無沙汰申して相濟み升せん時に妻君には初めてお目に掛つたが幸ひ今日はお引合せを願ひ度いもんですね」此男の癖として少しく冷笑ひつゝ挨拶すれば春雄も亦た之れに化して春「之れは改つた御挨拶ドゥも恐れ入り升したァ未だ妻でも無い令孃に僕がお引合せを致るといふのは道理に無い話し餘の人でもなし君の事だから夫んな禮儀ヶ間敷事は一切お廢止に致そうぢや無いか」糟谷勇次は齒を剥き出して笑ひながら糟「アヘゝゝ夫は主樣結構……僕の願ふ所だ失敬致升すヨ」と言ひながらツカ〳〵と進み寄りて春雄の傍に座を占めぬ春「糟谷君世界は廣しと雖ども僕の秘密に立入つて親切に世話して呉れる人は恐らく君

一人だらう」糟「左様重く用ひられては少々迷惑……でも無い恥ぢ入る方だが併し僕に於ては何んな秘密の話に加へられても又た何んな大切な依托を受けても夫を利用して不正な働を為ようなぞといふ太い了見は毛頭無いから夫れ丈け安心なもんだ」春「其處を見込んで君に依托し度いのは外でも無いが此令孃だテ實は夫れ少しく譯のある次第なんだから僕が遠くへ出て往かんけりや別に心配も無いんだけれども今度又た少しの間留守に為るんで外に誰にも賴んで置く人が無いから無理にも君へ萬事の監督を為して頂き度いんだが何うだらう」此時糟谷は得たり賢しと喜び勇んで糟「外に賴む人も無いんぢやあるまいが多少僕は事情も知つて居るし殊に此んな秘密は餘り他人に聞かせ度く無いからテ假令へ君が外の人物に賴まうと言つても僕が友人の情誼として飽くまで拒む考だ」と道理らしく且つ親切らしく言ひ轉せども口と心は裏表にて横を向いては舌を出し二人の暗愚を笑ひ居れり若し此有様を看破りなば如何に春雄も吾が最愛なる後の妻、花子の一身を斯る危險の人物には依托せざりしなるべし春「君なればこそ左様親切に云つて呉れる夫を聞いて僕も安心して出立が出來る就いて特別に君に依賴して置き度い事は御承知の如く餘り人目に觸れないように忍んで居無くちや成らぬ花子孃の事だから其邊の御注意を専一に且つ又た事に依ると國元から親とか親戚とか何う致して此處を嗅ぎ付けて連れに來るかも知れないから其時には決して渡して呉れちや困るんだ若し其んな様子が見えたらば素早く場所を替へて僕の歸るまでは必らず無事に保護して居て呉

れ無くちや成らんぜ糟谷は氣取つて反身に成り糟「夫りや勿論サ君の注意を待つまでもない話し其邊の事は僕が萬々呑み込んでるから安心して旅行し玉へ其中何か急な用事があれば君から手紙でも寄越して貰へば早速に運びを付けるからと打ち語りつゝある内に彼此れ時刻も長けて既に食事の時とも成りければ花子孃は別室に退いて衣服を着替え髮の亂れしを繕ひて胸に寳石を飾り頭には鼻打つ斗りに咲き匂へる薔薇の小枝を頂きて再び出で來りし時の美くしさは宛から天女を欺く斗りにて春雄勇次の兩人は思はずも振り向いて瞳を花子が顏に集めぬ花子孃も春雄が信じて疑はぬ儘ま糟谷勇次を腹黑き惡人なりとは思ひ寄らねば泣顏見せては春雄の恥と笑を含んで坐に着きしも胸に塞がる有耶無耶の忘れんと欲して忘れ得ざれば

兩の目の裡には涙を浮べて乾く間無きぞ不憫なる、斯くて三人打ち連れ立ちて食堂に入り糟谷が口から出任せなる追從輕薄の話の内に食事も了りて早や八時を過ぎ倉林春雄が出立の時間と定めし九時に間も無くなりければ春雄は糟谷の手を借りて手荷物の用意に餘念無く花子は卓子に凭り縋りて又も涙に暮れ居りしが、此時春雄は荷作の混雜に紛れ革袋の中より一卷の書類を取落せしに心付ざりしを早くも糟谷は鷲の眼にこれを認めて人知れず拾い取り其儘に己が衣嚢に納れしを花子も涙に目の昏みて更に此事を知らざりき軈て荷物の用意も整ひければ春雄は泣き伏せる花子が耳元に口を寄せて春「夫れぢや花子さん一寸と往つて來升す、ヨ直きに歸つて來るから必らず心配せずと身體を大切にして留守して居て下さい其代り今度

私が歸つて來れば今まで貴孃に包んで居つた秘密は悉とく打ち明けて話せるように成るのだから」と春雄の暇乞に花子は涙に濡れし顏を上げて「花「夫れぢや貴方は何うあつてもお山で成さらねば成りませんのですか何うゾお早くお歸りを」と言ふもオロオロ涙聲無情の糟谷は傍より「糟「倉林君滊車の時間は最う十五分しか無いぜ」と言はれて春雄は打ち驚き泣き伏す花子を後に殘し糟谷と共に停車場差して急ぎけり、其道すがら春雄は尙ほも糟谷に向つて「春「糟谷君花子の事は君に托して安心して居るヨ決して不都合なる事に致して呉れ玉ふナヨ君の妹と思ふて親切に致して遣つて呉れ玉へソシテ金も君に預けて置くから花子の勘定などは君の手から拂ふようにして呉れても宜い返す〳〵も頼む事は追手の付いた場合には素早く場所を變へて必らず

向の奴に渡して呉れるナ此れ斗りは君の心で盟つて置いて呉れ無くちや成らぬ」「糟「大丈夫だヨ安心し玉へ決して不都合は致さんから」と語りつゝ行ける程に早や停車場に着せしが時刻も丁度列車出發の間際なりければ春雄は周章て、切符を買ひ求め同時に金銀貨取交せ一千圓を數へて糟谷に渡し「春「此金を以て花子が生活の費用に立てゝ呉れ玉へ何事も宜敷頼み升す」と春雄は厚く後事を托して其儘に列車に乘り込み軈て吹き鳴らす滊笛と共に列車は進行を初めたり後に猛惡無情の糟谷勇次は停車場よりの歸り路頻りに獨り微笑みながら「糟「トッ〳〵花子は乃公の手に入つたナ有り難い併し考へて見りや春雄も不憫な奴だハ、、、、、先づ〳〵此方のものに成つて終へば天下泰平だハ、、、、」と喜び勇んで己が居宅に歸り來ぬ

第二回

倉林春雄が第一の目論見は花子孃の居處を世の人の目に觸れ耳に聞かしめざるに在るに相違無きも亦た春雄が擧動花子が爲めに一つの不思議有るにも相違無し、去り乍ら花子は春雄を信ぜる心の厚きより何事も吾を恐しくは取扱ふまじと思ひ詰め居れば不思議とは思ひながらも強いては仔細を尋ねんとも爲ず全く春雄の爲す儘に打ち任せて少しも喙を容れざる程なれば内心には蛇蝎の如くに厭ひ居れども其春雄が信じて疑はぬ斗りに表面のみ糟谷勇次を敬まひて無禮の取扱も爲さざりき、春雄は出立の後ち兩三日を經て花子の許に一封の手紙を送り來りしが其文面は至つて簡略なれども春雄が愛情は一字一句に溢れて宛かも相見て語るが如くなれば花子は嬉しさ

飛立つ斗りにて手紙は片時も身を離さず幾度と無く操り返して僅かに憂を慰さめ居りぬ、然るに其後は五日を經、十日を過ぎても春雄の許より唯だ一葉の端書だに送り呉れざれば花子は安き心もせず若しや春雄が身の上に異變の事でも起らずやと夫れのみ胸に横はりしが或日糟谷は遽だしく入り來りて國元の追手確かに當村に入り込み居れば油斷を爲れば一大事あり片時も早く場所を移して追手の眼を暗ます可しとて狼狽ひ廻る花子を急き立て其日の暮方に旅宿を引拂ひ已が妹と名を僞りて一と際淋しき田舍家に連れ往きぬ、花子は樣子を知らざれば糟谷が詞を眞實と思ふて花「マア好い鹽梅で厶いました迂闊りして居て捉ろうもんなら今まで苦しんだのが何にも成ら無く成る所でした夫に第一春雄さんに對して何とも申譯が無

く成るんでムい升したが貴方のお蔭で大難を遁れ升したソシテ追手に來たものは何んな人物でしたか御承知無いでムい升せうカ」糟谷は例の出放題「糟エー確か貴孃のお友達だとか申すことでしたヨ」花「へエー誰が來たろう花本の夫人さんが學校の友達でも連れて來たのか知らん兎に角マア〳〵好い事を致升した夫に就いて一寸は相談やし升すが春雄さんは何う致て入らつしやるでムい升せうテは出立に成つて聞もなく唯つた一度は手紙を寄越して下すつた切り何とも言つて寄越し成さらんもんですから此間中から妾は氣に成つて〳〵堪らないんですヨ何うにか致してお手紙を送つて下さるよふに言つて遣る工夫は有り升すまいでせうカ春雄さんのお身体にでも万一の事が有つた時には妾はホントに途方に暮れ升すから」糟谷は

澄して糟「私が付いてる中は決して貴孃が途方に暮れるよふな事は致し升せんから御安心成すつて入らつしやい大丈夫です何に春雄君の身体に別條があるもんでそカ」花「夫れぢや貴方何處にお出で成さるに致ても手紙の一本位は寄越して下さりそうなもんぢや有り升せんカ」糟谷は冷笑ひつゝ糟「へ、、、夫りや貴孃がお知り成さらんからです手紙を寄越さ無いのは春雄君の持前だもの私しや能く那の人の氣質を知つて居升す手紙を送ら無けりや心配するだろうなんといふ所に氣の付く人物ぢや無いんです」と言ひ甲斐のなき返答に花子孃も強いては問はず打ち過ぎたり、斯くて一日と暮らし二日と經ち段々日數を經るに從ひ糟谷の尋ね來ることも愈々繁く後には殆んど終日詰切りの有樣にて姑らくも花子が傍を去らず折に觸れては最と

と概らはしき詞をも聞くことさへありしが、最愛の本夫春雄が心を閉かぬ親友の事あれバ詞鋭どくは責めも爲ず何時も柳に受け流して其場の体を繕ひ居りぬ、或日の事糟谷は早朝より來りて花子が傍に坐を示め餘念もなく其日來りし新聞紙を讀み居りしが滊車に對する野蠻民の暴行と題する一項中に其時亂民の毒手に掛りて即死し又た重傷を受けしものゝ八名表ありて其表中の死者の部に思ひ掛けなくも倉林春雄といへる名前の記るしあるを見出だせり此時奸惡無情の糟谷勇次は心の中に「占めた〳〵此處で春雄が殺されて呉れたと來ちや天の與へだ愈々花子を此勇次さんの懐へ入れて呉れるのだ此んな有難い事は又たと無い併し此處が大事な處だうら能く考へて掛らんと失策つたりと來ちや取返が付か無くなるからナ待て〳〵

此處は一つ花子に春雄の殺されたことを知らさ無い方が宜かろうヨ愁しい知らせてドンと一發で死んでも終はれた日にや百日の説法屁一つだ好しんば死なゝいまでが尼寺へでも飛び込んで終はれりや夫れまでだからナ好い處へ氣が付いて呉れた之れも矢張り天の與へかナ兎に角有り難い」と已れの心に問答し体能く其場を胡麻化して新聞紙を携へし儘ま糟「花子さん私しや據ろ無い用事があつて今から少こ出掛けて來升すから事は依と一日二日伺はんかも知れ升せんから其積りで餘り外なぞへブラ〳〵出歩行いちや不可升せんヨ花子孃は内心にて「オヽ嬉しい二日や三日ハ愚か十日でも二十日でも來て呉れ無い方が妾の爲めに幸ひだ」と思ひしが少しも表面に現はさず花「オヤ〳〵左樣で厶い升すか二日三日お出で成さらん宜う

ムり升す決して外へは出歩行き升せん何うぞお早くお歸り成すつて下さい升せ」糟「エ直き歸つて來る積りですが用事の都合では少し滯在するよふに成るかも知れ升せん併し貴孃の食料其他は總て二週間分前拂に致してあるから其事には御心配無く私しも其中には伺ふよふに致升すから」花「色々お世話さまに預り升して」と糟谷を室外まで送りて再び元の坐に直り花「アヽ思へば〳〵嫌な奴だ妾を何か自分の厄介ものゝよふに取扱つて食料なども前拂に致して置き升したも無いもんだ春雄さんが留守中の入費は總めて誰かに預けて置いて下すつた事を妾はチヤンと知て居る那んな嫌しい奴といふ者はありや致無い」と糟谷勇次を惡しざまに言ひ做すに就いても二つ目には思ひ出すは春雄が事にて又も彼此れと獨り其胸を惱まし初めぬ、糟谷は花子孃に別れてより停車場に驅け付けて紐育行の滊車に飛乘り同府に到着の後ち直ちに孃の父生嶋條次郎の邸を音訪れしが取次の召使は玄關に出で來りて叮嚀に挨拶し召「誰殿樣でムい升す」糟「エー御主人の生嶋條次郎殿は御在宅でムい升すカ」召「ヘエーは宅でムい升すが貴方樣は何といふ名前を仰有り升すのでムい升すカ」糟「私しは糟谷勇次と申すものですが未だ一度も御主人に面會致した事が無いから御存じ無いかも知り升せん併し是非御主人に面會致さんぢやら成らぬ用事があつて參つたからと言つて下さい」召「此室で姑らくお待ち下さいませ」と召使のものは糟谷を玄關の應接所に導き置いて奧に入り間も無く再び出で來りて糟谷を主人條次郎の居室に連れ來りぬ條「サア何うぞ夫へお掛け成さい」糟谷は入り來るや否や嚴めしき生島

老人の眼光に睨まれて少しく身體を來たし恐る〳〵進んで[illegible]子の前に坐を構ひ精「エー貴方が生島老人でムい升るか」條「左樣でムい升す私が生島條次郎ですが貴方の御用事といふは何んな事です」條「お話し申そ前に伺ひ置き升すが貴方は花子さんと仰有る令孃が有り成さるやに存じ升すが相違ムり升すまいか此時生島老人は扨こそ自分の最愛なる娘花子を誘惑せしは此曲者なるかと滿面俄かに怒を含んで詞も荒らく條「花子と申すは私の娘ぢや汝が今の……ナンの人物か」と椅子を離れて立上れば精谷は事の意外に驚いて面を背くし精「イヤ私しは夫んな怪しい人間ぢやムい升せん」條「夫でも汝れ娘の事に就いて拙者の家へ來成すつたんだろうがナ娘の事を知り且つ其事に就いて尋ねて來る者は何れも仔細のあるものに違ひ無い」精「イヤ私しは決して貴方の疑を受けるよふなものではあり升せん尤も令孃の事に就ては少々存じて居る事もムい升す併し夫もヒヨッとした機會で令孃にお逢ひ申したので存じたまでゝ決して令孃を右や左う致したものではあり升せん」條「成程花子と申すものは一度は拙者の娘であつたに違ひ無いケレども唯今では公然親子の縁を切つたもので最早や拙者の娘といふ譯ではムり升せん」精「其邊の事は能く分り升した就いては甚だ御迷惑さまでもあり升せうが矢張り花子孃の事に就いて少々承はり度い事柄がムり升すがお差支も無ければお答ひ下さることは出來升すまいか」此時生嶋老人は坐に直りて條「言つて見さつしやい何んな事かは存せぬが不都合な事で無ければ知らして上げよふ」精「外ではムい升せんが今の花子さんと仰有る令孃

れ貴方の御先妻のお子さんで、貴方の爲めに代りの無い御一人子だと申すことは承はつて居り升すが夫れに相違あり升すまいか」條「左様です」糟「ソシて貴方の御先妻と申すのが花子孃に澤山お財産を遺して置いてお死去に成つたといふ事を聞き及び升したが之れも夫に相違ムい升すまいか」一旦面を和げたる生島老人此時再び怒の色を現はし條「餘計な事を人に向つて尋ねるものぢや有り升せんゾ汝は全体何者だ濫りに人の財産の事にまで吻を容れて花子が假令へ幾千万の財産を相續して居つても貧乏人の妻に成れバ一厘一錢たりとも手を着けることハ出來升せんのだ」飽くまで佞奸なる糟谷勇次は斯くまで怒鳴り散らされても尚ほ頭を下げて糟「イヤ姑らくお聞き下さい假令へ私が其事をお尋ね申上げた處で夫れ些とも花子孃を連

れて逃げたものゝ利益に爲す考でもムり升まん其人物は丸で私に關係の無い男ですから態々お尋ねに上る道理がムり升せん」條「シテ見りや汝は娘……イヤ花子を誘惑した人物を存じてお出でのかエ誰だ其人物は何處の何者です」糟「左様貴方のよふに怒鳴り散らして斗りお出でに成つては薩張り物事が分り升せんから少し靜かに成さつて私の話をお聞き下さい段々にお話し申し上げ升すから」此時老人は又も坐に直りて條「聞き升せう話し成さい」糟「順序を立てゝお話し申さ無くちや分り升せんが花子孃は今日までまだ何人とも結婚してお出ちやムり升せんヨ」條「ナニ誰れとも結婚して居無いのぢやと」糟「へエー左様です結婚は致てお出でに成り升せん唯だ惡い奴の口車に乘せられて欺されてお出で成さるんで誠とにお氣の毒さまな譯あん

でそ〆から假令へ令孃が母親さんから如何程の財產を相續し
てお出でゝあろうと其惡者が指も差すことは出來無いんです」
表面にこそ親子の緣は切りたりと言へ一人娘の花子孃內心爭
で愛せざらん其最愛の花子今ま惡者の罠に掛りて苦難の境に
落ち居れりと聞くからは一轍短慮の生嶋條次郎如何に堪え忍
ばんと欲するも忍び得ず火と燃え立つ胸の焰に滿面忽ち色
を變え拳を固めて起ち上り 條「ソ其惡黨は何と申す奴カ何處に
居るカ年齡こそ老ひたれ生島條次郎は昔時の軍人、南北亞米利
加戰爭の時は虎將軍の綽名を取り硝煙彈雨の間を馳驅して幾
千萬の軍兵を叱咤せし勇氣今ま尙は凜として目の當りに見ゆ、
此恐ろしき權幕に糟谷勇次は殆んと腰を拔かし 糟「マア貴方先
刻から何か申すと御立腹の樣子ですが夫れでは何うもお話が

出來升せん何うぞ沈着いてお話が願ひ度いもんでムい升すナ
丸で叱られ續けでお話も何も出來や致升せん何うかマア夫れ
へお座はり下さい……其惡者とヲすのハ意外な人物でお分
りに成ら無いも道理です生地ハボストン府のもので中等な家
の子でムい升すが其姓名を倉林春雄とヲし升す」と語るを聞い
て生嶋老人ハ上衣の衣嚢より一枚の新聞紙を取り出だして讀
車遭難の一項を讀み下し即死者八名中に紛れもなく倉林春雄を
といへる名の存そるを見て初めて片頰に笑を含み 條「ヘヽ惡黨
奴が惡い事を働けバ惡い報酬が來るに極つた話だ……シテ花
子ハ何處に居り升すカ糟谷勇次の內心にハ生嶋老人をして花
子孃が當時の有樣を憐れと思ハしめ且つ己れに不正の思識を
重ねて巧みに老人を謀らんと欲するより外に望み無ければ糟

「左様です實は斯ういふ譯なんでムい升す花子孃が倉林に捨てられ成すつてからといふものは抑も其日からの生計にお困り成さるといふ有様で如何にもお氣の毒の至りに思ひ升したから及ばずながら巫ばら私から費用を以てお助け申して居るよふな譯なんでムい升す」老人は小頸傾げて條「フム－夫りや少し變な話だ花子と倉林とか申すものとは既に結婚して終つて居る筈であるのだが」糟「イヱ夫りや何と仰有つても結婚致しちや居り升せんお疑ならば其證據をお目に掛け升せう」と糟谷勇次は前日春雄が出立の砌り思はずも取り落したるを拾ひ上げて隱し置きたる一通を取り出して糟「サア之れを御覧下さい之れは正しく倉林春雄が元野萱子と申す婦人と取結んだ結婚證書であり升すソシテ其萱子と申す春雄の妻は今ま現にコロラド

(土地の名)に生存して居るといふことが明瞭に分り升せう」條「惡黨奴が」と思はず一と言洩らせしのみにて口を閉ぢ傍なる樂椅子を引き寄せて腰打ち掛け深くも思案に沈みたり糟「ソコでは相談は之れから先き貴方に於いて花子孃を何う致してお上げ成さるお考がへなんでせうカ」之れに對する老人の返答は流石に少しは胸を痛めしと見え其詞も常の如くは滑らかならぬ條「ナニ何うも致さん考です己れの身から出た錆ちや第一には父親たる拙者に耻を與へ延いて一家の汚名を醸した不屆の女であるからは何うも致す考はムり升せん殊に現在の拙者が妻は當紐育府中でも人に知られた貴族の娘であつて見れば親元の權威に對し又た交際する人々に對しても斯樣な非人乞食に劣るよふな擧動を致したものがオイ夫れと言つては家へ入れる譯

には往かぬ假令へ路頭に迷ふて餓死するまでも拙者に於ては措はぬ考ぢや如何にも致て父生島老人の怒を宥め漸次に謀つて己が強慾を逞ふせんと企てたる、糟谷勇次は此時大いに失望しぬ　糟「ハイ――ヂヤ假令へ現在の貴方の一人娘子であつても更にお措ひ成さらんと仰有るので厶い升すか　係「分らぬ人ぢやナ以前は兎も角今日縁を切つた以上は親で無し子で無いのぢや又た一旦斯う縁の切れた以上は以後、他人として拙者の家へ足踏は無用です下女奉公致よふと申して參つても門より内へは入れる譯に參らんから共お積りで且つ汝さんだ所が考へて見りや厄介お話だ食物を與へ無けりや成らぬものを何時まで置く譯にも往くまいから嫌だと思ひ成すつたら措れず追ひ出して終つて下さい之れまでに申して置けば汝さんもお分り

だろうから私は花子の事に就いて最う何にも申さぬと言ひ放つて老人は起ち上り糟谷を後に殘して室より立ち去らん様子あるにぞ糟谷は周章てゝ　糟「マア姑らくお待ち下さい貴方は御承知か何うかも知り升せんが花子儀は今ま妊娠中で程無く子供も出來よふといふ處を左樣一概に仰有るのは些と無慈悲のよふに思はれ升す假令へ貴方に於てお措ひ成さらずとも責めて私に對し何分とも宜しく世話して遣つて呉れと一と言位は仰有つても宜しかろうと思ひ升す　係「イヤ何と言つても最う聞かぬ言れぬと申したら決して關係致さぬ彼女は餓死するとも水に溺れて死するとも凍へて死するとも拙者は少しも不憫と思ひ升せんと言ひ捨てゝ後をも見ぬ老人は其儘ま別室に立ち去りぬ、去れば糟谷も早や之れまでなりと失望の裡に老人

の後に従ひ此日は生島の邸を立出でしが、飽まで圖太き糟谷勇次は此儘に屈するものにあらず、路すがら何やら獨り打首肯ながら或る代言人の事務所に至り密かに何事をか打ち合せて後ち紐育を出立し下りの滊車に打ち乗りて花子孃が隠れ家の在る處ろ名も無き村に立ち歸りたり。歸村の後も己が謀略の手段なりとて姑らく花子孃が許を音訪れず、獨り吾が家に閉ち籠りて

糟「一旦は失策つたよふで少し氣を揉んだが却つて那ア從つて呉れた方が乃公の爲めに利益であつた生島の口裏では心から見捨てた花子だから煮よふと燒かふと勝手に致いと言はぬ斗り其處へ丁度春雄の間拔けは殺されたのだから最う花子の事に搆ふものは誰も無い此上は花子も乃公の言ふ事を聞くか左様で無けりや死んで終ふかだが具逆に說いて聞かしたら命の惜しく無い人間は無いから乃公の言ふ事を承知して妻に成るに極つた話し若し左様成つた曉には紐育の代言人も言つた通り花子の名義に成つてる遺囑財産は忽ち花子の物に成る花子の物即ち乃公の物も同様だから大分話が甘く成つて來たワイ」と獨り空中に樓閣を譜いて笑壷に入り居りしが其後四五日を過ぎ久々にて花子孃の許を音訪れしに、花子は性命を掛けて戀ひ慕へる春雄の許より其後何等の音沙汰無きまゝ案じ煩らひて肉は痩せ眼は凹み左しも美しかりし容色も今は凄きまでに青醒め鬱々として樂まざりし折ありければ糟谷勇次の入り來るを見て若しや春雄の便にてもと心にも無き追従輕薄

花「オヤ糟谷さん今までお歸りでムい升したか餘り御逗留が永いんで御心配申して居り升したマア此方へお掛け成さい時に春

雄さんの所から貴方へ手紙でもお寄越しに成り升せんでしたろうか」糟谷は遠慮も無くヅッと入り来りて横椅子に身を憑たし最うとも憎体に「糟嬢に心配し升すな左様貴嬢のやふに疲るのも構はず心配したって旅へ往ってるものには塵栗ほども感じたもんぢやあり升せんヨ馬鹿々々しい最う心配はお廃止に致しちや何うでせう春雄君の事あれば尋ねられるまでも無く僕から申上げ升すヨ併し春雄君は最うチヤンと甘く成ってるんだから何にも申上げることはあり升せんナ」左無きだに春雄の身を案じ煩へる花子嬢今ま糟谷勇次が詞の尾の怪しきは正しく春雄の一身に何事かの起りしに違ひ無しと思へば忽ち面色を變へ花「糟谷さん春雄さんがチヤント何ー成すつたんです左様根性悪く隠さ無いで明白に言ってお聞かせ成さいヨお願いで

すから」糟谷は冷笑ひつヽ糟「何を貴嬢に隠して宜いもんですか些とも隠しや致升せんチヤーンと甘く遣ってるから左様申したんです」花子嬢は愈々氣を焦立て花「糟谷さん妾しや決して冗戯にお尋ね申すんぢや有り升せんヨ外の事なら兎も角もですが夫れ計りは眞實にお聞かせ成すつて下さい此の通り拜み升すから」と兩手を合せて頭を下ぐるを見て糟谷は又たもセヽラ笑い糟「へヽヽ私しは神ぢや無し拜がんだって致方が無いぢや有り升せんか併し貴嬢が夫れほどまでに聞き度いと仰有るなら……イヤ／＼言ふまい……言へバマア斯うなんですチヤンと濟して居ると之れ丈けです」花「夫んな事を言って妾を嘲弄は無いで眞實に教へて下さいお願ですから」糟「サア夫がチヤーンと濟して居るのですヨ」花「チヤンと何う致て濟まして居成さる

んですカ」糟「チャンと欺まして済し込んで居ます」と聞いて驚き叫ぶと思ひの外花子は少しも騒がず」花「ヘヱー誰を欺まして済し込んで居成さいますカ」糟「言は無いでも知れて居まさァね貴嬢をサ」花子は笑ひながら」花「ホヽヽ糟谷さん夫んな事を言つて妾を欺図ごうと仰有つても妾しや決して乗りませんヨ妾はまだ春雄さんに欺されるよふな悪い事を致しません」糟「ッヘァ夫れだから困る貴嬢は悪く無くたつて向が悪くて貴嬢を欺ませべ夫れまでぢやありませんカ」花「糟谷さん外の事なら串戯と言つて済みますけれども夫んな友達の讒訴めいたことは無暗に言ふものぢやありませんヨ妾しが眞實に致せんから夫で済むよふなものゝ若し一つ間違つて夫んな事を眞に受けて騒ぎでも初まつて御覧成さい貴方は親友の春雄さんに對して交際を絶

た無くちや成らぬよふに成るぢやありませんカ」糟「ダつても眞實の事だから致方が無い」花「イーヱ春雄さんに限つて決して夫んな不實な方ぢやありません」糟「貴嬢は斷言しましたね」花「ヱー斷言しましたとも」糟「面白い驚いちや不可ませんヨ」と言ひつゝ衣嚢の中より一巻の書類を取出して花子の前に差し出し」糟「サア之れを披いて御覧成さい之れでも私の言つた事は虚か偽りカ」花子嬢は何心無く件の書類を披き見たるにコは其も如何に世は廣しと雖ども吾れより外に聊か心を寄せし女の無しと今まで信じて疑はざりし倉林春雄が、現在元野萱子と呼べる婦人と二世を契りし結婚證書、嬢は讀み了つて其場に倒れ髪振り乱し歯を喰切り身を震はしてぞ泣き伏したる、猛悪無情の糟谷勇次は此有様を見て何ほ憐れを感ぜず糟「之れでも貴嬢は私の詞

を僞りと言ひ升すかヨモヤ言ふことは出來升すまい馬鹿々々しい初めは瘦せる程心配して其次には腹を立つて一番終には慕つて居た人を怨んでツンシテ恐く言つた人を慕ふよふな事に成るんだ何故女といふものは斯う淺墓なもんだろうナ花子さん今まで見て居た夢も之れでヨモヤ醒めたでせうネ」と言へども孃は答へぬのみか今まで聞えし泣聲も止みたれば糟谷は頸を差し延ばして倒れし孃の横顏を覗き見れば面色宛がら土の如くに變じて頭髮逆立ち兩眼朱を注ぎ石の如くに身を固めて震へる樣は流石の惡黨も膽を潰し「糟「コリヤ大變だ癪を起した打ッ遣つて置きや死んで終ふ今ま死れちや何にも成らぬ」と長椅子より跳ね起き孃を抱き上げて靜かに横椅子の上に置き有り合ふ洋盃に水を持ち來りて額の邊に注ぎ掛けつゝ聲を限り

に喚び起したる甲斐ありて程無く正氣に歸りし花子孃は辛ふじて口を開き「花「何うぞ打ち遣つて置いて下さい決して此儘まには死に升せん何んな艱難苦勞を爲てゝも一遍春雄さんに逢つた上で此眞否を糺さ無けりや妾の胸は霽れ升せん」「糟「態々逢つて聞か無くても此書類より確かな證據は無いぢや有り升せん」「花「イヤ〳〵夫んな書付は見度く無い何うぞ妾の目に觸れ無いよふに貴方の懷へ納つて下さい……アヽ若し此事が眞實なら春雄さんは實に人間で無いと起ち上りては又た倒れ倒れては又た起ち上り宛かも狂人の如くなれば糟谷は言ひ出す詞無く寧そ姑しが間は靜かに差し措くに如かざる可しと詞和らかに花子に向ひ「糟「花子さん此う成つたものを騒いだつて致方が無いから何れ緩くりは相談は致す考へですが氣の立つてる時

は話が分からぬから今日は歸り升す其代り明日は早くから來升すから氣を確かに持つて必らず心得違へを致ちや不可升せんヨ」と言へども花子は詞無ければ糟谷は其儘ま引き取りて明る日早朝に尋ね來りぬ、花子孃は心の悶え少しく靜まりしも泣き脹したる目の中には絶へず一ばいの涙を含みぬ糟「花子さん改めて申すんぢやあり升せんが實に貴孃はお不憫です貴孃は御承知無いけれども私は先達て紐育へ往つて貴孃のお父上さんにもお目に掛り色々腹を搜つて見升したが貴孃の顏は見るのも嫌だと言つてお出でゝすから所詮貴孃を引取つて何う斯うは爲さらず春雄君は那の通りの始末だし紐育のお友達衆は片端から貴孃の事を惡く言つてるよふな譯だからマア此世界で貴孃の友と言つたら此糟谷一人でせう夫を思ふと實にお氣の毒

で堪らないから及ばずながら貴孃の生活に差支無い丈けのものは見繼いで居るよふな譯で………併し「ハムレット」といふ演劇の舞臺詞にもある通り人間といふものは親切心が強い丈け又た殘酷な心にも強いものですからチ貴孃もマア是から先の事を能ーく考へて成さらんと飛んだ間違が起らんとも言へ升せんから」今まで一言の詞も無かりし花子孃は初めて口を開らき花「へエー夫りや變なお話でムい升す春雄さんは妾の爲めに後へお金を殘しては出では成らんのですカ」糟「イーヤ一厘も置いちや往き升せん」花「アヽ何う致て斯う嫌な事斗り多いのだろうと又も兩手に面を掩ふて其身の不幸を悲しみ初めぬ此時惡黨の糟谷勇次は日頃ろ心に企みたる計畧の成否を試すは今まに在りと尚ほも花子孃の傍に寄り添ひ糟「花子さん夫んなに何

にも悲しんで計り居るに當らんぢやあり升せんカ貴孃も不仕合で思つた人に捨てられたのだから何も時代を極めて此儘で置かれぬあんッて威張らずとズッと開けて春雄氏の事を思ひ切つて終へバ宜いぢやあり升せんヵ貴孃れ何う思つてお出でかも知り升せんが私しれ隨分貴孃に情愛を運んで居る積りです今まで改めて貴孃が私を一生涯の友と致して呉れると言つて下されバ私の身に取つちや之れに増した喜びはあり升せんで何うです花子さん」と言ひつゝ孃の手を提り引き寄せんとせしを振り拂つて起ち上り花「糟谷さん嫌です何うぞ夫んな紊りヶ間敷い事を爲て下さい升すナ」糟谷はニヤリと笑ひ糟「夫んおに無情な挨拶を致無ても宜いぢやあり升せんか」と尚ほ提らへし手を離さねば孃は愈々氣を焦ち花「何です糟谷さん妾が默止つ

て居るとおもふて勝手を言つたり致たり成さる妾しは夫んな穢らはしい事は嫌ですから此手を早く離して下さい」と一生懸命の力を出して捉はれし手をモギ取れバ糟谷勇次は口惜そうに糟「夫れなや貴孃は今まで私しの厄介に成つて居た恩を忘れて何うあつても私の言ふ事を聞かぬと言ふのですカ」花「左樣でムい升ず假令へ何と仰有つても貴方の詞に從ふことは出來升せん其代り唯今限り貴方の厄介には成り升せん」と言い放つて一室に退き旅の手荷物取揃へて小脇に抱え花「アヽ思へば殘念な事を致た那んな惡黨の世話に成るのだと知つたらバ決して今まで居無かつたものと」糟谷の方に脇目も振らず其儘ま此處を飛び出でぬ、跡に殘されたる惡黨勇次姑し双手を組んで思案に沈みしが此後如何なる計略を廻らして可憐孃生島花子を

苦しめんとぞする

第三回

壁は縱横に裂目を生じて破れ落ちるに殆ど〳〵し紙張もて硝子の破壞を支へたる窓の戸は朦朧として充分の日光を導かず、布き詰めたる毛布は切れて穴を生じ一脚の椅子一箇の寢臺は既に斜に傾きて坐臥し易からず之れに附屬せる一物一品、欠けざれば毀われ朽ちざれば破れて一として元の形を存するものあらざるは之れなんボストン府なる最下等下宿屋の一室にぞある、寢臺の上には年齡うら若き一婦人あり其顏色は靑醒め其肉は瘠せ落ちて骨を顯はし僅かに身に纒へる襤褸をもて生れて月を越へざる赤子を抱き上げ其スヤ〳〵と眠れる顏の罪無きを見ては流るゝ涙を留め兼ねて思はずワッと泣き出す聲に驚か

されて目を醒せる赤子の脊中を撫で擦りて亡き母親の恩愛に感じ初めて吾が身の不孝を悟りて深くも天罰の恐る可きを覺えしは之れぞ倉林春雄の跡を慕ひて米國ボストン府に來りし生島花子孃なり、孃は今より數月の以前春雄が親友、糟谷勇次の毒計に苦められて辛くも田舍の隱れ家を逃れ出でしより衣服其他の所持品を賣り拂ひて僅か斗りの路用を作り諸處方々と彷徨ひ歩きしも春雄が行衞の更に知れず其中路用は段々に盡き殊には日毎に重もる妊娠の身何時まで旅行の爲し居らる可きにあらねば一と先づボストン府に足を留めて再會の時機の至るを待たばボストンは春雄の故郷にもあり且つは吾が身の生地紐育府にも近ければ何事にまれ便利ならんと茲に下等下宿の一室を借り受け晝は下宿人の衣服を洗濯し夜は縫針に

幾何つゝかの賃錢を得て細くも其日を送り居りしが其中姙娠の月も滿ちて初子といへる女子を擧げしに春雄が面影の其儘まに初子の顏に殘るを見て嬉しと思ふは涙の種なり、左無きだに手足纒ひの出來し爲め其日〳〵の生計も思ふ儘まには營み兼ねし、を思ひの種まで蒔きたれば朝夕に心を痛むる事のみ多く涙の乾く間さへ無かりしが、花子は元と富有の家に生れ殊更ら一人娘の事とて塵も取らせず育てたれば身体の柔弱きことは言ふまでも無きを幾多の艱苦に身を削りて骨と皮とに痩せ衰ろへたれば其年の冬を迎へて肌刺す斗りの寒風には所詮其手足の曝らし得らる可くもあらず去り、とて一室に閉ぢ籠りて爲す事も無く過ぎたらんには母子兩人は忽ち饑ふるか凍ふるか何れ異鄕の土に葬られて世の厭しみを増すに至らんのみ、左や

せん右と思ひ煩ろふ其中にも花子は倉林春雄といへるが野蠻民の毒手に罹りて斬り殺されたる顛末を掲げし新聞紙を讀まざれば今ま尚は此世に生き永らひて居ることゝ思ふて春雄の此處に在らざるを此上無き憾と爲し居たり去れども旦夕に迫まれる兩人の運命、如何に春雄が事のみ思ひばとて此場の難儀を免かれ得ざれば花子は遂に心を定めて花「ア、斯う成るのも妾の不運に違ひ無いが又た考へて見れば妾の行が惡るかつた今の阿母さんは初めから妾を憎がつてお出で成すつたから今日に成つて妾を犬畜生よりも厭しんでお出で成さるは知れ切つた事だけれども責めてはお父上さんなりとも妾の賴みにと思つて居たのに何時かの新聞紙に妾の事が出るのを讀んだ時にも新聞社の探訪者にお父上さんが最う那んな畜生同樣な奴

は公然親子の縁を切つたから子で無し親で無しだと仰有つたと書いてあり又た那の糟谷の悪黨がお父上さんに逢つた時にも門より内へは入れぬと仰有つたと言ふ事でもあり所詮妾は宅の門を這入る譯に往かぬであろうから之れが妾一人の事ならば假令へ凍えて死るのを助けて下さら無くても些とも怨みは爲んけれども何にも知ら無い此初までが妾の爲めに寒さに凍え餓死するとお聞き成されたらば少しは心も和らぐであろうから何と仰有るかも、知ら無いがお父上さんに宛てゝ手紙を送り妾共母子が今日の、難儀を逐一お知らせ申して救助を求むるのが一番早道だろう」と花子は早速手紙を認めて「嚴寒の砌りに御座候へ共父上さまには何のおん障りも無く御無事御暮し遊ばされ蔭ながら嬉しく存じまいらせ候扨て妾事父上并びに母

上に對し奉り生きては再び面を合はす事の成り難き不孝の大罪を作り其申譯も立たぬ今日に斯よふある儀申上候へ者必らず人非人犬畜生とおん賤み遊ばされ尚ほ〳〵おん憤りを増させられ候事とは固より存じ居り申候去り乍ら妾一人の身に罹り候事に御座候へ者如何なる苦みを受け候ても是は父上并びに母上に對して妾の作り候不孝の罪の報ひと諦め決してお耳を濆し候よふの儀は申入れ間敷候へ共妾の身に負へる罪の爲めに何の罪も無き娘初までを饑寒に迫らせし儀親の心にて如何にも不憫に堪へ難く去りとて父上には疾くよりは承知の通り妾事は平素柔弱き身体に之れありし處へ初と申す足手纏ひの出來し後ちは身体も一層に弱り殊には何彼に付け隙欠く事斗りにて思ふ儘には稼ぎも相成らず搗て加へて昨今の寒さ劇

しく候爲め手足凍えて水仕事に堪へ兼ね唯々日々母子兩人に
て雪の降り積り候室の中に閉ぢ籠りて餓死を待つより外に致
方無き憐れの有樣に成り果て申候何卒父上の慈悲に依り娘
初事も繋るゝ縁と思し召し候て邸の物置きなり又た臺所の
片隅にても母子兩人が餓寒を凌ぎ死を免かれはよふおん許し
遊され度く遙かに伏し拜み申候尚ほ申上度き事は山々御座候
へ共餓寒に迫り筆も廻り兼ね候まゝ之れにて妾共兩人の今日
をおん察し被下度候かしく、花より父上さまへ」との意味を以て
細々の事情を書き並べ尚ほ現在の住所下宿屋の町名番地等詳
しく書き載せて紐育府なる父生嶋條次郎の許に郵送しぬ、斯く
て花子は艱苦の裡に今日か明日かと一刻千秋の思を爲して父
の返事を待ち居りしに無慘や二週間餘の日を經て後ち何の音

沙汰も無かりしは父は手紙を目に觸れざりしか花子の手紙は
父に憐れを感せしむるの力無かりしか、花子も今まは狂人の如
く「アヽ之れほど思ふ妾の心が少しもお父上さんには感せぬ
か春雄さんには通ぜぬか最う此上は致方が無い假令へ此襤褸
を一枚脱いで賣拂つてゞも紐育までの汽車賃を才覺して宅の
玄關へ据り込まふ愚圖々々して居ちや初も妾も死んで終ふと
共夜の明けるを待ち兼ねて花子は身に着けし衣服を脱ぎ足に
穿ちし靴と共に賣拂らひ漸やくにして汽車賃を得たれば身に
は一枚の單衣を纏ふて初子を肌へに確かと抱きしめ痩せ細り
たる女の素足に降り積りたる雪を踏みつゝボストン發の一列
車に乘り込み故郷紐育府に到着せしは宛かも十二月廿五日に
て市中の賑ひ一方ならざるクリスマスの當夜なりき花子は僅

かに持ち餘したる一枚の風呂敷もて初子の手足を叮嚀に包んで肌に入れ其身は一本の傘をも挿さず降り頻る雪を冒して停車場を立出でしが何を言ふにも數日前より僅かに麵包の切屑にて辛くも生命を繋ぎ來りし事なれば五体は弱りて力も拔け素足に踏み込む雪の冷たさは腦にも響く斗りにて足の運びも速かならねど父の邸は停車場より甚だ遠からぬを力に思ふてホトホト歩み來りしが軒を並べし左右の市家は此宵を晴れの千燈萬燭、輝く光は戸外に洩れて雪に映じて晝を欺むき朗々と唱へる歌の聲は玲瓏として趣味を含む音樂に化し與へるもあれば笑へるもあり戸々の賑最と盛んなれば花子は思はず歩みを留めて太息を吐き「花ア、今まで些とも氣が付か無いで居たが成程今夜はクリスマスだ道理で市中が大層賑やかだ妾も初

めからお父上さんのお側に孝行を盡して居るか但しは春雄さんと世間晴れての夫婦に成つて居たことなら矢張り此の通りに夜徹し賑やかに騷いで遊ぶのだに思へば思ふほど妾は不幸な人間に生れて來た」と獨り心に悲しみつゝホロリと落せし一と雫は之れぞ花子が身を絞りし血の涙とは言ふなるべし、斯くて果つ可きにもあらざれば花子は再び歩を進めて漸やくに近づける父母の邸、吾が年未だ幼かりし時彩多の腰元女中に取圍まれて日毎に遊び、戲ふれたる芝生の庭も今は一面に雪の降り積りて宛かも白砂を撒けるが如く花子の目の先に現はれぬ、結構壯大なる家の內には電氣燈の光り目眩き斗り窓を洩り來る笑の聲は確かに心覺へある花子が義理の兄弟姉妹、今宵無上の快樂に吾を忘れて躍り跳ねるぞ怨めしき花子は邸の門前なる

傘の如くに生ひ茂れる樫の木の幹に身を寄せて、姑しは嘆きに沈み居りしが聽て玄關の方に歩み來りて力無くも石段を上り既に凍えて物の感覺を失へる指先もて柱に仕掛けし呼鈴を押し鳴らせし時は自分が生れし家ながらも花子は胸も轟きて虎口に臨める思の爲せり程無く奥より駈け出で來りし一人の家從は何人の尋ね來りし爲らんと玄關の戸を引き開けて奥の燈光に照らし見れば思ひきや乞食に劣りし身裝の婦人虫の息程ある赤子を抱へて悄然として頭を垂れ居るに家從は一と足踏み下りて少しく怒りを帶び從「ヲヽ穢ない誰が來たのかと思つて出りや乞食女だ大袈裟に玄關などへ這入つて來やがつて早速と出て行け〳〵此お邸では乞食女に用事は無い」と戸を閉ぢて奥に入らんとせる家從の袂引き捉へて花子は降り注ぐ涙

を拂ひ兼ね花「汝は富吉ぢや無いか妾の顏を見忘れたのか」と言ひつゝ少しく顏を上ぐれば富吉は差し覗いて大いに驚き富「オヤ貴孃は花子さまでは厶い升せんか」花「妾は花だよ此んな姿に成り果てゝ召使の者にまで乞食女と間違ひらるゝも矢張り妾が不孝の罪だから決して汝は怨み升せん早く家へ這入らしてお呉れ」と花子が内に入らんとするを無情の富吉は大の字形に手を擴げて之れを拒み富「コレ〳〵花子さん其な姿を見ては如何にも氣の毒さまに存じ升すが、ト申して貴孃を今ま内へお入れ申す譯には參り升せんヨ」此詞を聞くや花子は其場に泣き伏して花「夫れは富吉餘んまりお慘い致方といふもの」と怨む詞の終らざる中、花子が繼母の聲として奥の方にて苦々しく繼「富吉や……夫んお穢らはしいものは二分間も玄關へ置くことは

成り升せん早速と追ひ拂つて終ひ成さい愚圖々々として居ると承知し升せん汝をも一所に追ひ出し升すッ」と言ひ放ちたる繼母の一言に花子が爲めに氷の刃、胸を刺し貫かるゝ思ひを爲し花「アヽ情無い仰有り方、如何に内へ入れぬ迚決心でも左樣毒々しく仰有らずと宜さうなものだな死去り成された阿母上さまー若し魂魄があり升すなら何うぞ此難儀をお助け下さい升せ此儘ま此處から追ひ出され升すれば妾共母子は路端に倒れて死んで終ひ升す」此時再び繼母の聲繼「死ぬるとなりとも生きるとなりとも已れの心次第に爲るが好い……オイ富吉早く追ひ拂つて終れぬか」と主人の嚴命默止し難く富吉も亦た詞を荒らげ富「サア〳〵何處へなりとお出で成さい那の通り仰有るもの所詮此邸へは這入られ升せん致方が無いと諦めて早く此玄關

を出て下さい花「ヲは富吉何うぞ一寸とで好いからお父上さんに逢はしてお呉れ」と聞いて又もや繼母の聲繼「へヽヽヽ何んで夫んなものにお逢ひ成されよふッ旦那さまに逢ふとは押が太いワ」と言はれても尚は花子は富吉に縋り花「唯つた一と言お話し申上げれば好いのだから汝嫌でもあろうが取次いでお呉れ此通り頼み升すと手を合せるをも顧みず富「夫りや幾何拜んでも駄目の皮ですヨ平素から旦那が若し汝さんが歸つて來ても決して内へは入れて成らぬ直ぐと其場で追ひ拂つて終へと嚴しく申し付けてお置き成すつた位ですもの何んでお逢に成るものですか何事も諦めが大事だ何時までも其處で愚圖々々して居て私共にまで迷惑を掛け無いでサア早く何處へでも往つて下さい」花「妾し一人なら仮令へ餓え死しても凍えても些と

も摑ひれ爲ぬけれども此赤ン坊が……と言ふを遮り冨「幾何言つても駄目だからお出で成さいといふのに執念いナ」と弱り果てし花子が肩先に手を掛けて表の方に突き飛さんとせしを花子は茲ぞ一生懸命力の限り戸に捉まつて身を動かさぬ花「冨吉夫りや餘んまりだ……お父上さま何うぞお助け下さいませ假令へ臺所の片隅でも母子のものが露命を繋げバ夫で宜しう厶い升す何うぞ憐れと思召して不孝の罪をお許し下さい升せお父上さま阿母上さま」と狂ひ叫ぶを見れども聞けども憐れを覺えぬ冨吉ハ鬼乎惡魔乎愈々益々聲を荒らげ冨「實に強情だナ其處で何れ程騒いでも旦那さまハお聞き成さらぬ假令へば聞えても決して御返詞ハ成さらぬから愁じい此處へ粘り付いて居て折角のお客を妨げて憎しみを増すよりか温順に出た方が利

益に成るワ」と戸に捉まりし花子が手をモギ取り石段の方に突き除けれバ憐れや花子は蹌々々と敷石の上に倒れて泣き伏すを見向きも遣らず家從冨吉は戸を閉ぢて奥に入りぬ此時奥の一室に奏する唱歌の聲、樂の音と和して朗かに聞えぬ

第四回

啻さへ寒き冬の風、雪は止間も無く降り連れバ厚く着て暖爐を取圍む身にも尚ほ冷たきを覺ふる夜半前、繼母の爲めに追ひ拂はれ無情の冨吉に突き飛バされて敷石の上に打ち倒れたる花子が身にハ如何に厳しく刺したらん、母の懐にありとハ言へ繿縷の單衣に包まれたる赤子も寒さに堪へ兼ねてか聲も斷絶に泣き叫ぶを憐れと思ふ心を力に花子ハ漸やく起き上りしも全身冷え渡りて目も眩み手足に力も拔けたれバ俄かにハ得も歩

まれず鐵の柱に凭り掛りて兩手に確かと赤子を抱きしめ花オー〳〵寒いであろう冷たかろう汝の爲めにはお祖母さま妾を産んで下された母上が此世に永らへてお出で成されたらバ汝令へ以前の如くは成らぬとも責めては汝と妾とが饑え凍えて死ぬる丈けハ助け成されて下さるだろうに死ぬとも生きるとも勝手に致せと仰有つた今の母さまのお詞ハ如何に妾が不孝の罪を作つたにもせよ餘んまり報酬が酷かろと思ふ怨じい父上があるからと思ふて頼みと致たのが妾の落度だ斯ういふことゝ知つたならば汝の顔を見ぬ中に海へでも飛び込んで阿母上さまのお跡を慕ふて往けバ宜かつた今と成つてハ汝が可愛い斗りで死ふと思ふても死ぬることハ出來ず食べようと思ふても食べるものは無し寢ようと思ふても寢る所ハ無し此

上は神のお指示に從つて運命次第に任せるより外に汝を助ける工夫が無い」と袖ハ一ぱい涙に濡れ左右の肩にハ降り込む雪の積るも忘れて泣き喞てるぞ不憫なる、此時又た廣室の戸を明け憎々くしく氣に聲を掛けしハ紛れもあらぬ繼母なり總「富吉や……富吉……乞食奴ハ未だ其處等に愚圖々々して居る樣子だから所詮此方の手では追い拂ふ譯に往くまい巡査でも呼んで來て早く屯所へでも連れて往つて貰れ無けりや大勢のお客を相手に致て裕くり遊ぶことも出來や致ない好いかエ富吉早くだよ」と主人の詞に富吉ハ一年一度のクリスマスを邪間ものゝ爲めに妨げられて愉快に酒をも飲み得ずと呟きながら出で來りたる顔色ハ以前に倍して怒を含めり富「花子さん大概に人を苦しめるもんだアチ先刻から幾度口詞を費やすことか知れたもん

ちやない早速と往つてお呉んなさい強情張んなさりや致方が無い巡査を呼んで引渡すから左様思ひ成さい……默止つて其處で泣いて計り居たつて仕方がない往くとか往かぬとか言つてお呉んなさい　花「妾しや巡査の厄介に成る位なら何でお父上さんの家へ歸るものか今まで往き升す」富「左様でせう汝さんも滿更ら乞食の腹から出た人でも無し巡査の厄介を掛けて世の中へ耻を曝し度くれ無いでせうサア早く往つてお呉んなさい　花「夫れちやお父上さんには……」富「分らないナ夫りや駄目だといふのに幾ら言つても同し事だから諦めてお出で成さい」と頼の綱も切れ果てゝ無慈悲の繼母に追ひ立てられ花子も今は絶對絶命最と怨めし氣に目を見張りて一度び我家の方に振り向き　花「モー再び此家の閾れ跨がぬから富吉お父

上さんに宜しく傳言を申してお呉れ」と何れに往かん目的は無けれど足の向ふに打任せて其儘に此處を立出でぬ若し此最後の一言にして花子が繼母の耳に入りしならば「ヤレ嬉しや」と重荷を下ろせし心地ぞしたらん、花子はトボ〱と歩みを進め身に降り積る雪を拂ひ除けつゝ市街の通りを左手に向ひしも落付く場所の定めは無し偶ま路傍に生ひ茂りて雪を插せる樹の下に至りては姑しと其場に踏み留りて苦しき息を吐きも敢へず廻りの巡査に見咎められて巡「オイ〱夫んな所に立つて居つては不可ん早く往け〱」と又も追ひ立てられて花子は恐る恐る　花「ハイ」と返事は爲せしものゝ固より行先の定め無ければ途方に暮れて躊躇ふを無情の巡査は聲高く　巡「往けと申すに何故往かぬカ路傍に立つて往來の妨害を爲そものは夫れ〱規

則に於て罰することに成つちよるゾ早速と往け」と言はれて花子は餘儀無くも此處を立ち出で宛かも虫の這ふが如くに歩み歩みつ遂に通りの三ツ角に突き當りて左手に曲れば劍の如き北風に咫尺も見えぬ吹雪に打たれて目も開け兼ね踉めきながら頭を垂れて半丁斗りを歩みし時向ふの方より靴音も無く全身毛布もて包み纒ひし一人の男、足に任せて駈け來りし途端に思はず花子に突當れば左無きだに吹けば飛ぶ程に痩せ衰へし花子の事、大の男に突き飛ばされては何ぞ堪らんアツト言ひさま後へ堂と打ち倒れたる響に驚いて懷なる初子が頻りに泣き叫ぶ聲を聞いて件の男も氣の毒とや思ひけん花子の手を捉りて扶け起し男「何處かお怪我は厶い升せんでした、カ此の降りだものですからツイ知らずに突き當り升して何うぞ御免成すつ

て下さい升せ赤さんの何處をか毆ちは致し升せんでしたカ」と言ひつゝ花子の顏を差し覗いて痛くも打ち駭き男「オヤ貴女は花子さんぢや有り升せんカと名前を呼ばれて花子も吃驚りしつゝ目を開いて其顏を窺へばこれ如何に蛇蝎の如くに嫌ひ厭へる糟谷勇次なり花「オヤ汝さんは糟谷さん何うぞ其處離してお呉んなさい」佞奸邪智の糟谷勇次は己が日頃の望を達するは此時なりと故と面に情の色を浮べて糟「ナ、何を貴女夫んなに泡を喰つて何處へお出で成さる考なんですソシてマアお不憫に此寒中に單衣物を着てマー〳〵お待ち成さい私が決して惡くはお取扱ひ申さぬから實を申せば何時か貴女が大層怒つて飛び出し成すつてから私はモー心配で〳〵居ても起つても沈着かぬから直ぐと貴女の跡を追ふて出て今まで斯う致して諸所〳〵

方々を捜し歩いて居る所なんですマア〳〵ほんとに無事で好かつた」と親切めきたる糟谷が詞も花子が心には責めらるゝ思ひ 花「何うぞ糟谷さん後生ですからお逃がし成すつてお呉ん成さい 糟「お待ち成さいと申そのに貴女も強情です私の言ふことも些とは聞き成さいナ決して貴女の不利益に成ることは言ひ升せんから其お抱き成さつて入らつしやるのは貴女の赤さんでせう不憫に此寒中に而かも此雪の降るのに傘も挿さず外套も着ず若しも凍えて路端へでも倒れりや夫れまでぢや有り升せんか赤さんも共に……」と言へども花子は聞き入る可くも見へず 花「マア何でも宜う厶い升すから何うぞ其手をお離し成すつて下さい 糟「全体貴女は今から何処へ往くお考なんですか」花「何処へも往きや致し升せんのです 糟「夫れは覧成さい夫れだから私

が貴女を手離さ無いのです貴女が家へお帰りに成つてもお父上さんは決して寄せ付け升すまい……左様でせう……夫んな身装で行処の無い貴女を今ま私が手離せば貴女を死に遣るよふなものです貴女が假令へ何んと仰有つても貴女を見殺しに致ちや此糟谷勇次の義務が欠け升す徳義が潰れ升る決して悪い事は申さぬから茲れ一つ此糟谷の言ふ事に従つて下さい 花「イーエ何れほどに仰有つても妾は決して従ひ升せん」糟「貴女は性命が惜しくは有り升せんカ赤さんが不憫とはお思ひ成さらぬカ」花「何うで助からぬ妾ですから何うぞ妨げずと安楽に死なしてお呉ん成さい」糟「夫りや何と言つても貴女の了見違ひです氣の立つてる時分にや性命が惜しいと思はぬは人情だけれども沈着いて考へますと決して夫んなものぢやあり升せん 花

子さん能ーく考へて御覧成さい那の通り春雄君が那ア成つて終つた以上は私を此世の友達として私の詞に従つた方が貴女のお利益ですが」花「妾の前で春雄さんのお名前を言つて下さい升すナ假令へ何う成つても斯う成つても言ひ交はした本夫は本夫です此子の父親です其名前を聞けば矢張り思ひの種に成ります」糟「成る程貴女は念が深い欺まして逃げたものを夫んなに思つてお出でだもの遂に此んな了見違が生じて来るのだ」花「妾を欺ましたのは決して春雄さんの御了見から出た事では無い汝さんが間言を利いて妾を欺ますよふに計からつたんです夫んな穢らわしい人とは詞を交ゆるのも嫌ですから此手を離して往かして下さい」糟「サア其考が悪いのですヨ思ひ直して私の言ふ事をお聞き成さい左様すりや今夜から夫んな苦しい思を為

さんでも両人共に啖かに生活が出来るちやあり升せんか」と飽くまで不敵の挙動に花子も今は性命掛け「エー面倒な」と振り離して蹌めく足を踏み占めて此場をころは駈け出しぬ取り逃がしては残念と糟谷も纏へる毛布を脱ぎ捨て花子が跡を追ひ往きしが向ふに輝く角燈の光は必定夜廻りの巡査なる可しと聲を限りに呼び立てゝ糟「其婦人を捉まへて下さい……逃がしては成らぬです……其婦人を捉まへて下さいと叫びつゝ宙を飛んで駈け往く途端に思はず敷石に躓いて俯向さまに打ち倒れたり、巡査は斯くと聞き付けて何事の起りしならんと足を早めて此場に来れば憐む可し糟谷は瓦斯燈の台石にて痛く額を撃ち破り血潮に塗れて苦しみ居れば巡査は先づ糟谷を抱き起して前なる小料理屋の窓下に連れ往き創を洗ため且つ事情を聞

き乱さんとせしに糟谷は宛がら狂人の如く糟「オイ婦女を捉まへて呉れ升したか那の駈けて逃げた婦人を」巡査は静かに巡「汝は誰れにか殴れでも致したのか」糟「イエ左様ぢや無い那の婦人を捉まへて下さいと申すんです」巡「汝は酷く創でも受けたと見へて顔色が悪いが気は確かであるか」糟「私しの事は何うでも宜うムい升すから早く那の婦人を捉まへ無いと逃げて終ひ升す」巡「分らぬ男だナ婦人を捉まへて呉れと申しても何んな次第であるか夫を聞かな無くては無暗に捕縛致す訳には参らぬ何か盗まれでも致したのか」糟「イヤ〱左様な訳ぢや有り升せん那の婦人は気違でそ打ち遣つて置けば死んで終ひ升す抱いてる子供も一所に死に升すから早く追ッ付いて捉まへて下さい」と聞いて巡査も初めて其事実を知り人民二名の生命に拘はる大事なれば

創に悩める糟谷勇次を其場に残して花子の後を追ッ掛けたり花子は饑寒の身に迫りて常事さへ歩行に苦しめるを悪黨勇次に捉はれたる事の恐ろしさに吾を忘れて駈け出だせしなれば凡そ二丁斗りを往きし頃は早や目も暗み足も進まず雪の塊に躓いて之れ亦た路上に打倒れて泣き叫べる赤子の脊中を撫で擦りつゝ僅かに息を繋げる処に追ッ掛け来りし警察官は赤子の泣声を聞き付けて駈け寄りつゝ角燈差し延ばして照らし見れば髪はオドロに振り乱して面色土の如く積れる雪に身を埋めて手足も充分に動かぬ様は生ける人とも思へぬ程なり巡査は腰を屈めて耳元に口を寄せ巡「オイ……オイ気を確かに持つて居れオイ起てるなら此手に捉まつて起たんか」と言へども如何で起たる可き花「ハイ有難うムい升そが迚も起つてとは

出來ませんと答ふる聲も細りて糸の如し「巡夫れは甚はだ困却したナ此降りの強いのに夜も大層更けたから人通りは無し車は居らず何う致たら宜かろうナ」と流石に巡査も思案に暮れて居たりし時、花子の運や強かりけん一輛の空馬車は上手の方より雪を冒して馳せ來りしに巡査は大いに力を得て「オイ之れ馬車屋……待て〳〵茲へ其馬車を持つて來い」と角燈を振り上げつゝ呼び留められて御者は取調にでも受くることかと迷惑そうなる面付にて車を留め「御旦那へ何か御用で厶い升すカ」巡「何用があればこそ呼び留めたのだ知れ切つた事を聞く奴だ御う、も恐れ入り升した」巡「恐れ入らなくても宜しいから茲へ來て少し此孃の手を貸せ此婦人を乘せて屯所まで往くのだ警察の御用と聞いては過分の賃錢を貪ぼる譯にも往かねば御者はシ

ブ〳〵臺を下りて巡査と共に花子を抱き上げ車の内に連れ込んで「御旦那へ貴方も一所に屯所へお歸り成さるんですか」巡「左樣だ貴樣のよふなものに任せ置いては何處へ連れ往くかも知れや致無い」御「警察の御用を仰せ付けられて何で夫んな太い事が出來升すものですか夫れ兎も角も旦那へ今夜は此んな甚い吹雪ですから不憫と思召して三十錢丈けお遣り成すつて下さい升セ」巡「特別を以て三十錢遣はすが餘んまり車が搖れ無いよふにト言つて遲くちや不可ぬから早くて靜かに氣を注けて曳け」御者は低聲に「御何時もながら無理な事斗り言つてらア今夜はクリスマスで早く宅へ歸へろうと思や馬鹿々〳〵しい此降りに此んな厄介ものに取ッ捉まつて三十錢斗り貰つて割にも何にも合つた仕事ぢや無い」と呟きながら最寄の屯所に曳き往き

ぬ、屯所に詰め合ひて警察官は人民保護の職掌とて痛くも母子を不憫に思ひ早速醫師を呼び寄せて或は煖ためて或は服藥せしむるなど其手當の薄からねば一旦凍えて死に殆としたる花子も漸やく正氣に立ち歸りて其夜の明け方、花子は寢臺の上に打ち臥しながら不圖目を見開らき今に居る所の何れなるや、又た如何にして斯る暖かき寢臺の上に飢寒を凌ぐに至りしや、更に知る由無けれども虫の息ほどなりし娘初子が今は滿面に血氣を帶びてスヤ〳〵と寢入れる姿を見て乾かぬ涙押し拭ひて莞爾と片頰に笑みを浮べぬ

第五回

一旦心に死を決して粕谷勇次の手を振り離し倒るゝまでに逃げ去らんとせし生島花子は、思ひ掛け無くも警察官の保護を受けて數日の間屯所に療養し尚ほ快氣に向ひし頃ろ醫師の勸告に依り慈惠病院に入りて厚く手當を受けゝれば幾何も無くして再び元の身体に回復し初子も共に元氣を取返して惠まれし衣服を暖かに身に纏ひ自分も衣服より靴に至るまで世の慈善家の惠與を受けて漸やく人間の姿に立ち歸り、見紛ふほどの人と成りしも唯だ異ならぬは心の病、既往の事を思ひ出でゝは涙に袖も絞らん斗り又た行末の事を考へては初子が身の上に胸を痛めつ煩らひ惱まぬ日とても無かりしが去りとて一度び親に捨てられ本夫と定めし倉林春雄は今に行衛の知れざる事若し此儘に身を殺さば世の物笑ひと成るは必定、亡き母にまでも汚名を重ねて不孝の罪は益々深ければ唯だ此上は初子を育て春雄に再會の時機を待ち一度び耻辱を雪がん爲め女の腕の折

るゝまで身を粉にしても職業を執り母子の露命を繋がんと心には思ひ定めしも富貴の家に生れし身の悲しさに世常の事に心疎くて所詮下女奉公の勤まる可くもあらざれど幼きより父母の教育行届きて普通の學問をば身に脩め居ることあれば田舎小學校の教師に雇はるゝか、或は富家の内教師と為るか但しは寫字生として雇はるれば辛くも其日の送られ得ざるにもあらず何れにしても初子といへる足手纏ひある中は所詮職業に從事することの成り難きを悟り姑らく心を鬼にして初子を慈善養育院に入れ吾が身の方向定りて餘財の積りし時を期し母子相共に衣食するも遅かるまじ幸ひ自分が屯所にて取調を受けし其時にも、本名を明かして父母を辱かしめ春雄に汚名を與へんことを恐れて土非ぬ梅と變名せしかば、初子を假り

に土非ぬ力と名けて養育院に入れたらんには一は吾が本名に穢れを増さず一は吾が父母兄弟姉妹は申すに及ばず夥多の友達知人より惡黨糟谷勇次にまで母子兩人の所在を晦ますに都合宜からんと花子は獨り胸の中にて夫れ〳〵手順を整へたりしが憎む可し糟谷勇次は密かに花子の後を尾け來りて屯所より慈惠病院へ油斷も無く眼を配りて樣子を探り、若し退院の許可を得て花子が院外に出で來るに逢はゞ物の小蔭に待ち構へて又も已の爪牙に掛けんと飽くまで毒惡の計略を廻らして可憐の母子を惱殺せんと企てしが不敵なる、花子は勇次が自分の後に付き纏ふて斯る企圖を為せりぞとは露ほども知る由無ければ或る日退院の許可を得て病院を立出で勉めて知人の目を避けん為め初子を抱いて頭を垂れつゝ裏町を抜け養育院の方

を差して足を急がしぬ養育院の受付にハ一人の若者卓子に打ち向ひて忙はし氣に帳簿を記け居りしが花子の入り來りしを見て筆を措き若「何ぞ御用ですか此方へお掛け成さい」と椅子を進められて花子ハ恐る／＼進み寄り叮嚀に挨拶し了りて花「看護婦長ハお出に成つて居り升せうか」若「エ居り升すが貴女ハ御面會に成り度いのでムい升すか」花子は此處ぞ吾が最愛の娘初子と別かるゝの場所なりと思へバ徐ろに催ふす涙を隱して花「ハイ左樣でムい升す誠とに御手數さまでムい升すが一寸と御取次を」若「少々夫へお待ち下さい」と言ひ捨てゝ若者ハ奥に入り行く跡に花子ハ初子が顔に頬押し當てゝ花「今日限り姑らく汝と別れ無くてハ成らぬと思へバ實に此胸が裂けるよふな心持が致升す汝のよふな可愛い子を些との間も人手に渡し度くハ

無いけれども之れも矢張り持つて生れた不幸と諦めて何うぞ無病に育つてお呉れ」とホロリと落す一と雫の初子が額に流るれバ初子は母の嘆きも毀らで莞爾と笑ふ愛らしさに又も決き來る涙を留めて姑しは目を閉ぢ出す詞も無かりしが軈て院内の彼方此方を見廻はして花「願つても叶はぬ事かは知らんが出來る事なら此養育院で何んな苦しい仕事でも一つの職業を授けて貰つて責めて汝が獨歩行の出來るまでも朝夜傍に居て養育して遣り度いのが山々だが」と獨り言ちつゝある折しも梯子段を下る靴音の聞えて此方に人の出で來る樣子に花子ハ涙押し拭ひ泣顔隱して待ち居れバ程なく室の戸を開いて花子が前に現はれしは年齡の頃ろ三十六七と覺ぼしく容貌柔和なる一婦人あり婦「妾しに逢い度いと仰有り升したは貴女でムい升す

か、誠に御待たせ申し升して失礼を「花子は赤子を抱きながら腰を屈めて「花お忙がしい處へ出升して定めて御迷惑さまで厶い升せう」婦「イーエ何う致し升して大層可愛いお子さんで厶います子」と言ひつゝ花子の前に坐を占むれば花子も共に椅子に掛りて「花斯う致てお邪間に出升した子供も餘の儀では厶い升せんが之れへ連れて参り升したのも姑らく御當院の御厄介に預り度いと存じ升して」と言ふも誠とに精一ぱい後は涙に聲も曇れば看護婦長は不思議の顔付にて姑らく花子の樣子に目を留めて後「婦貴女はお名前を何んと仰有りますカ」花「妾しは土井お梅と申すもので厶います」婦「ソッヲ御亭主はお有り成さるんで厶いませう子」花「ヘイ嘗とは厶いましたが死去りまして唯今では此子と二人り暮しで厶いますと僞りて本夫と定めし人に捨て

られ斯る困苦に沈みしありと明白さまに事實を延べざるも深く舜雄を思ふの情あるべし婦「夫れで貴女は共お子を何う致しても自分で育てることが出來成さらんのですカ」花子は頭を垂れ流るゝ涙を手巾もて押し拭ひつゝ花「ヘイ御覧の通り柔弱い妾し左樣無くても辛つと一人の生活が出來るか出來無いかで困り升すのに此子が足手に纏ひ升しては所詮何事も出來よふ筈は厶り升せずト申して此子を連れ升しては何處へも雇はれて參ることも出來升せず此儘に今日明日と日を送つて參り升すれば終には路端に倒れて饑死に致すより外は厶り升せんので餘儀無く御厄介を願ふので厶り升す」と涙ながらに物語りぬ去れど發育院の看護婦長は斯る愁嘆を耳にすることの珍らしからねば婦人ながらも別に涙を催ふす可き氣色は見えざりし

が、花子が永の憂き艱難に身体は充分に瘠せ衰ろへて見異るほどに變れ果てしも唯だ美くしき天然の面影は失はんと欲して失ひ得ず殊に貴しき家に生れしにあらねば自づと備はる氣高き品格輕佻浮薄の世の習俗に染まで本夫を思ふ貞操心より斯る貧苦に惱めるぞとは流石に看護婦長も見て取りければ「婦 夫れは誠とにお氣の毒さまな事充分承知致し升した」と答へし詞も常には似遣らず情を含めり聞いて花子は且つ喜び且つは悲しみ「花 誠とに有難う存じ升る斯よふの貧苦に陷り升すのも之れ皆な妾の不運不幸でムり升して何事も心に諦めては居りますけれども唯だ心の殘りますのは此子が事でムいまして最う此世の中に妾が血を分けた身内と申し升るのは此子より外にはムりません責めての事に妾しの顔も覺え何うか斯うか獨

歩行も致すよふに成りますまで朝晩傍に居つて何蚊の世話を致して遣り度いとは存じますれども今ま申し上げました通りの次第で御當院の御厄介に成りますよふな譯ではムいますが唯だ此上のお願ひは決して妾しに於て給金を頂かうのお手當を貰ふのと申す心得はムいませんので何うか御當院で妾をた使ひ下さることは出來升せんでムい升せうか」と道理責めし詞を聞き看護婦長も一概には拒絶し兼ね姑し思案に沈んで詞無かりしが軈て斷然たる面色にて「婦 誠とには道理なお詞です妾も今まで當院に居つて種々樣々な方に出逢つて不幸なお話しも聞き升したが貴女ほど妾の心にお不憫だと思つた人はあり升せん貴ら以て心底貴女のお話には感じましたから若し妾しの力で出來まする事なら假令へ何んな六ヶ敷い事であらうとも聽

度骨を折つて致して差上げますけれども貴女のよふなお願を聞き升して預つた子供の母親を此院へ雇ひ込むといふことに成り升すと貰に際限の無い話で日に何十人の人を入れ無けりや成らぬことに成るかも知れ升せんので此院の規則として何んなお不憫なお母子でも子供丈けしか置くことは成らぬ事に取極めてあり升すから必らず恐しく思は無いで其事丈けは出來無いものと諦めて下さい其代りお預り申した其子は決して粗末に取扱ひ升せん貴女に成り代つて大切に氣を付けて養育し升すから必らず心配成さらんで心離してお稼ぎ成さい其代り若し都合能く此近邊へ貴女が雇はれて住み込むよふにでも成り升したら毎日のよふに尋ねてお出でに成つても夫れ丈けは妾がは承知申して置き升すから」と親切見えし詞を聞いて花子も少しは哀別の情を慰め花「誠とには親切なお詞を承り升してお噺の申上げよふも厶い升せん今日より唯だ貴女を力に安堵して職業を勉强致す心得で厶い升す」婦「承はつた處が致方も厶い升すまいが貴女は何んな事がは出來成さるんですか」花「夫りや最う此の通り零落れた妾の事で厶い升すから何んな苦い仕事でも致す考で厶い升す」婦「何が一番能くお出來成さるんです」花「若し此上のお情では當院へは雇ひ下さい升すれば帳簿を記ける事も存じて居りますし夫が不都合なれば黒奴の代りに水仕事でも何でも致す考で厶い升す」婦「併し夫りや前にお話し申した通りで到底此院へお世話申上げることは出來升せんから他に心當りも有りますりや早速お世話も致しませうが兎に角左樣いふ譯だから急に此近邊で口をお搜し成さる方が宜う厶

いませう花「ヘイ色々御親切さまに有難う存じ升す就き升して一寸と伺つて置き度い事がムり升すヨモヤ夫んな事のあろうよふもムいませんが人間と申すものは誠とに生身のものでムりますから何時又た何んな事の起らぬでもムいませんが若し妾しの身体に不祥の事でもありました節には御厄介を願ひました子供は何う成りますものでムいませうか」姉「若し貴女の身に万一の事でもあつた時分にはお預り申しました子は大切に育てゝ何處か好い家で貰人のあつた時に立派にして遣すことに成つて居り升す」花「左様でムい升すか妾しこそ此子を手離すが嫌でムい升すけれども子供の為めには結句好い家に貰はれて參つた方が仕合せかも存じ升せんと涙ながらに初子のお力を懐より出して花「夫れでは貴女御厄介さまでもムい升せうが何ま

分とも宜しくお願ひ申上げ升す……オヽ左様々々自分の言ひ度い事斗り申して未だ此子の名前も申し上げ升せんで此子はお力と申し升すから」と兩手に抱いて看護婦長に渡せし時花子の心は如何なりしぞ母を知らざる初子が他人の膝に抱き上げられて唯だ莞爾々々と笑へるを見ては胸も砕くる思ひのしたらん斯くて花子は盡きぬ名殘りに涙を絞りて何の婦人に別を告げ一度び養育院の門を立出でしが兎角に足の進み兼ねて一と足歩みては又た一と足を退ぞき宛がら鉄の鎖もて其身を繋ぎ留められし心地せしも吾が進まんとする路の上には尚ほも恐る可き劒の横はれるに露ほども心付かぬぞ是非も無き花「アア何んな境界に陥つても矢張り親子は親子だ假令へ心で忘れよふと思つても身体が忘れ無いで此通り後へ引かれる夫を思

へば妾のお父上さんと今の阿母上さん………イヤ〳〵最う考へ
まいフツ、リ思ひ切つて忘れて終ふ初が事も左様だ懐しい生
きて居ると思へば涙の種だ寧そ死んで今日葬つたと思へば夫
れで濟むと思ひ定めて養育院より通りの方に出で來らんとせ
し時後の方に人ありて花子の手を捉らへ「姑らく待つた」と聲掛
られて花子は思はず冷やりと背中を汗に潤ふしぬ、

第六回

花子は意外にも手を捉られ聲を掛られて吃驚りせしが何者な
らんと震ひながらに後ろを振り返り見れば今しも養育院の受
付にて一心不亂に帳簿を記け居りし書記の若者なり「花」ハイ何
ぞ御用でムい升すか」と言へば若者は詞優しく「若」折角お歸りの
所をお引き留め申して誠とにお氣の毒でしたが實は先刻汝さ

んが看護婦長と色々く身の上話と爲すつた時私しは帳簿を記け
ながらも心は半分汝さんの話に奪はれて扨も世の中には不仕
合な婦人もあるものかなと感じ入つて聞いて居り升したが何
うやらお話の摸樣では汝さんもホンの着の身着のまゝで幸つ
とふ子供を預けて之れから職業を搜すんだとか言ふ事でした
が御承知でもお有ん成さろうけれども職業と搜すと言つても
今が今まオイ夫れと言つては雇はれる所も無いだらうし何れ
三日とか四日とかいふ間は少くも搜して歩行うなくちや成ら
んのだが些とはお金でも用意してお出で成さるんですか」捨つ
る神あれば又た助ける神ありとの俚言に洩れず世には親切な
る人もあるもの吾が身が今の落魄を憐んで思ひ掛けなき注意
を受け花子は喜びの涙に咽び「花」御親切さまに有り難う存じ升

す先刻の話をお聞き下された上は定めし御承知でもムり升せうが今日まで母子二人が露命を繋いで參り升したのが辛つとの事でお金の蓄へなどは一文もムい升せん若「左樣でせう何うも左樣だろうと思つたから實は後を追つ掛けてお引き留め申したのですが決して遠慮は入り升せんから茲に五圓ある之れを以て口のあるまで下宿屋へでも何處へでも落付いて緩くりお搜し成すつた方がお利益です」と衣囊より取り出したる五圓の紙幣を、花子の前に差し出せば花子は受け取つて押し頂き花「之れを頂き升しては誠に濟まぬ事とは存じ升すが御覽の通りの今日の有樣で實は何う致したら好かろうかと之れから先の事を考へて途方に暮れて居り升した處でムい升すのに貴方のお陰さまで助かり升そ誠とに有り難うムい升す何れ妾しの身が

何とか方向の立ち升した上は屹度此のお禮に伺ひ升す失禮ながら貴方のお名前を何と仰せでムい升す」若「イエ私しは池田甚太郎と申すものですけれども決して夫んなお心配には及び升せんョ唯だ其金の爲めに汝さんの身が立ちお子供も無事に成長して汝さんが再び世の中へ出られるようにお成り成さりや私しは夫れを喜ぶのですから……ト云つて何も私は大層富有の身ぢやあり升せんが其金を返して貰はなくても何うやら差支なく生活の出來る身體ですから心配なく使つて下さい」と年齡に似氣なき親切に花子もほと〳〵喜び泣き花「夫れでは之れを頂き升そ此のお禮は再びお目に掛り升した節に……」若「決して夫れにや及び升せん身體を大事にして口をお捜し成さい」と花子を殘して池田甚太郎は院内に入り又たも卓子に打ち向ひて、

帳簿を記けんと試みたれども尚花子が事の心に掛りて筆持つ指先のワナ〳〵と震ひ意の如くは文字も書き得ねば筆を措いて「イヤもう不憫な婦人だ那んなのを助けて遣ら無けりや功徳に成らない先刻も頻りに此院へ雇はれ度いと言つて居たが僕が此院を退いて此書記の職務を那の婦人に譲つて遣ろうか知らん左様したら嘸ぞ喜ぶだろうナ好し〳〵兎もあれ一つ呼び戻して遣ろう」と池田は花子を引き留めんとて再び門外に飛び出でしが此時遅く彼時早く花子のお梅は既に此處にあらねば池田は往来へまで駈け出でゝ通りの左右を見遣りしも影だに見えざるに呆然たり花子は思ひ掛けなき池田の恩恵に少しく生き回りし思を為し其儘に裏町なる最下等の旅宿に到りて小やかなる一室を借り受け其日は終日戸外に出でずして身体の疲

勞れを養ひしが翌朝は早く此處を出でゝ最寄の新聞社に到り其日の新聞一葉を買ひ求めて人員雇入の廣告を捜せしに幸ひにして帳簿方専任の書記を雇入るとの商店事務所二三ヶ所あるを見出したれば花子は嬉しさ言はん方無く先づ其内の一軒に就き町名番地を取調べて其新聞紙を小脇に抱へ路程の遠きを厭はずして足を限りに尋ね往きしが終に其家に尋ね當れば之れぞ代言人の事務所なり、花子が押し鳴らす呼鈴の音に答へて奥より出で來りし小僧に伴はれ花子は一室に入り頭は禿げ髯は白く最と厳めしき容貌なる代言人の前に座を占めぬ此時代言人の傍には商人と覺ぼしき男の二人來りて頻りに何事か語り居りしが間も無く立去りて後ち代言人は花子に向ひ「お待たせ申して濟みませんでしたが用の趣を承はり升せうか」花子

れ詞叮嚀に餘の儀でも厶りませんが今日の新聞紙に貴方で帳簿方兼任の書記を雇入れに成る廣告が出て居り升して若し妾しを使つて頂け升すまいかと存じまして……」と全く言ひ了らぬに代言人は詞を發し「代ヤ左樣でしたか夫れはお氣の毒でした唯つた今ま外から來たのを極めました」と聞いて花子は失望せしが若しやと思ふて「花書記より外に人の這入用は厶りますまいか」代言人は冷淡に「代唯今の處では入りませんナ又た入る事があつたらお願ひ仕升せう」と自分の用事に立たんとするにぞ花子も今は詮方無く長居は無用と此處を立ち出で第二番目に尋ね往きしは或る商館の支店なり支店を扱へる番頭は身の丈け五尺に足らぬ小男にて額の角立ちたる處ろ又た目の玉の光り方は人の憐れを身に覺えぬ利慾の虫と見受けられぬ入り

來りし花子を一室に入れて「番ア汝さんですか廣告を見て來成すつた方は「花左樣で厶い升す「家何處かで雇はれ成すつた時の精勤證書(外國の風習として書記を雇入るゝには以前他所にて書記を勤め解雇されし時に精勤證書を貰ひしものを撰ぶ)をお持ちならお見せ成さい花子は固より斯る證書を所持せる筈も無し「花妾は其證書を所持致しません併し貴方の御都合で一日でも二日でも試驗の爲めにお使ひ下されたらばお役に立つか立たぬか分ろうと存じまそ」番頭は手を振つて「番夫りや不可ません私方では何んな人から申し込んでも精勤證書のない人は一切使はぬ事に規則を立てゝ居ますお氣の毒でしたがお斷り致します」と又も一言の下に謝絶せられて花子は愈々力を失ひ其日の新聞紙中に廣告したる場所丈けを殘らず尋ねて問ひ

合せしも一軒として花子を雇はんと言ひ出づるものなく其中段々日も暮れて鳥も塒に歸る頃と成りければ泣くも笑ふも詮方なく其日は其儘に旅宿に歸りて夕の食事を終りし其日一日の奔走に身体も痛く疲れたれば直ちに臥房に入りしも胸に一物の横はる身の俄かには得も眠られず彼を思ひ此を考へ其身に負はる不幸を嘆き喞ちて冬の夜の永き遂に一睡の夢をも結ばで曉を迎へしが明れば前日の空に引き替へ滿天快よく晴れ渡りて一點の雲を見ず未だ一月の初めなるに吹き來る風の和らかに春めきて(西暦の一月は冬の分なり)降り積りたる市街の雪の解け初じめ道路は少しく泥濘るみしも心氣は何と無く壯愉を覺ふる日となりぬ、去れど花子が胸の中には遮る雲の霽るゝ間も無く此日も鬱々として旅宿を立ち出でしが其運命は前日

に異ならずして先づ帳簿係の書記として數多き新聞紙の雇人廣告も一として花子を滿足せしむるの結果を與へず尋ぬる家も頼む人も皆な花子が身の上を憐れんで雇ひ入れんとするものも無ければ花子も今は書記として雇はれん望みを斷ち或は乳母として或は學校教師として或は音樂教師或は下女或は食堂の給仕女或は小間遣ひ或は子守り女と凡そ新聞紙の廣告に有るとあらゆる雇人の口を尋ねて日毎に市街の東西を奔走すること四五日の多きに及びしも遂に一軒として花子を雇入れんとの相談に應ずるものなく其中に早や池田甚太郎より惠まれたる五圓の金も盡きて明日は旅宿を追ひ立てられ再び路頭に迷ふ可き憐れの境遇に迫られぬ若し此儘まに手を束ねて爲す事もなく過ぎたらんには落ちて乞食の群に入るか左なくば

餓えて死するより他に方法も無きことなれば花子は再び狂人の如く市から街を徘徊ふて戸毎に人の門口に立ち涙ながらに身の不幸を訴へて何がな職業を得度しと乞へども世には無慈悲の人の多きが花子を狂人として笑はざれば痴愚者なりとて嘲けるのみ可憐の女子なりとて詞を掛け不幸の人なりとて勞はるものには遂に一人も出逢はざりきア丶如何なれば花子は斯くも不幸の女なるぞ、斯く運命の拙き上は此後如何ほどに思を悩まし心を碎くとも所詮生き永らへて初子の成長を見、再び春雄に廻り合ひて身に積み重ねし恥辱を雪ぎ無き生の母、又た現在の父親に對して不幸の罪を謝するの時は得らるまじ寧そ之れまでの壽命と諦らめ唯だ一と思に淵河に身を沈めるの外は無しと思案に竭きて女の一と筋、裏町通りを夕まぐれに河岸

の方へと駈け行きながら花「阿母上さんも阿父上さんも之れまで作つた不孝の罪は何うぞお許し下さいませ又た春雄さんを責めての事此世に永らへてお在で成さるなら妾の代りに初を大事に育てゝ下さい夫より外に妾の望みはムいません」と口の中にて別を告げつゝ聽て河岸端に出でんとせし時、始終花子に付き纒ふて動靜を窺ひ居たる糟谷勇次は物蔭より躍り出でゝ花子を後ろより確かと抱き留め糟「花子さん心得違ひを致ちや不可ませんお待ち成さい」と言ふ聲聞いて花子は振り返り花「汝のよふな惡黨に些とも用事は無い何うぞ其手を離してお呉れ」と身を揉掻けども女と男、勇次は何ほども力を入れて二歩三歩後ろに引き戻し糟「お待ち成さいといふのに強情な……貴女は私に向つて惡黨々々と仰有るが何時私が貴女に對して惡事を働

きました惡事を働いた覺えの無い斗りぢや無い心底から貴女の身の上を不憫と思へばこそ斯う致て蔭へ廻つて貴女を保護して居るぢやありませんか假令へ貴女が私を嫌つて逃げ廻つても私は貴女の身の成行は一伍一什皆な知て居ます貴女が屯所から病院へ送られた事又た貴女のお子を養育院へ預けた事まで幾の個ふことまで知つて居ります若し貴女が眞勇に那のお子が可愛いとふ思ひ成さるなら私の詞に從無いで居られんぢや有りませんか此世の人は貴女の爲めに一人りとして鬼ならぬは無い中で蔭へ廻り先を潛つて貴女を助けよふと思ふて居る此の糟谷勇次を惡黨などとは何事です」と詞巧みに諭せども骨髓を貫きし勇次が惡念は容易に花子の身を去らず花「イーヱ何と言つても汝は惡黨だ用事は無いから離しておくれ一旦

死ると覺悟した上は一分間も此世の風に當り度くは無い」糟「ササ夫れが大きな了見違ひ死んだ貴女は苦を忘れて好いだろうが後へ殘つた子供は何うです親を知ら無い子供の嘆きは一生涯忘れることは出來ませんゾ貴女は自分の兩親に對して不孝の罪を作つたのだから多少の艱難辛苦は堪へ忍んで子供に餘計な嘆きを殘さぬが正當の行ひでせう惡い事は言はぬから此處は私の詞に任せて一度び思ひ留つて下さい」と言へども花子はイツかな聞き入る樣子も無く花「後へ殘つた初が事は神の御加護を願ふのだ假令へ妾がこれまで親へ不孝は致ても夫りや妾し一人の身に掛る罪だ何にも罪科の無い初までが其報酬を受けて苦しむ因緣は少しも無い何れほど汝が親切めかして妾を此上辱めよふと企んでも決して欺されるよふな花では無い斯

う致て居る中にも若しや巡査に見付れバ折角の決心も水の泡と成る共手を離して苦れ無けりや妾が此通り離して見せる」と死を決したる女の一念力も平素に百倍して勇ましく抱き留めたる糟谷が手頸をギウと捉らへし花子が掌中には全身の力一所に集りて糟谷は腕も痿るゝ斗りに思はず抱いたる手の緩めバ花子は振り拂つて後をも見ず一目散に駈け出すを糟谷は跡を追ッ掛けて又も捉へんと近くを花子は横に突き除けて矢を射る如くに飛び行けり執念深き糟谷勇次は尚ほも其後を追ッ掛けつゝ聲を限りに叫び立て「誰れか來て呉れ……人殺しだ…………助けて呉れ……」と呼べど答ふる人もなし花子ハ早くも河岸端に出で棧橋目掛けて駈け下りしが何やら低聲に二た言三言口の中にて唱へつゝ憐れむ可し十有九年の夢の世を哀苦の淵に過ぎ來りて黒白も分かぬ波の間にザンブと斗り飛び込みぬ

第七回

折柄河岸の下手より厚綿の「ジヤケツト」服に皿の如き帽子を頂ける一人りの舟子、鼻歌唱ひながら棧橋の方に來かゝりしが咫尺も見えぬ闇の夜なれども海に育てる舟子の目は又た別段のものにて何やら黒き物影の棧橋の上に見ゆるハ怪しと頸を傾けて透し見ながら歩み寄りしに軈て何やら物言ふ聲の風の吹き寄せにて聞えしは紛れも無き女の聲、扨ては人間なりしか去りとては又た今時分女一人にて棧橋の上に佇立み居るとハ合点往かず仔細ある身に相違無ければ事の次第を尋ねて呉れんと髭ムシヤの荒くれ男なれども心は温順なる飛田熊吉踏み留ま

りし足を進めんとせし時ドブンと響く水の音に件の女は波間に入りて影も見え無くなりければ魂消し熊吉は吾を忘れて聲高く熊「エー身投だつたか氣が付か無かつた左樣と知つたら駈けて往つても留めて遣るんだつたに殘念な事を致た併しまだ澤山と深くは沈まんだろうから急いで往つて引き上げて遣ろうと心急き立て駈け寄らんとせしも繼足(片足を木にて作りしもの)の悲しさに思ふ儘まには走ることも叶はぬ跛足引きつゝ漸やくに棧橋の上まで駈け付けしも早や水面には卷ける渦だも無く折しも引汐の流れ最と急なれば流石に廾子の熊吉も双手を組んで太息を吐き熊「アゝ駄目々々此の引汐に出逢つちや一分間でも此邊に沈んで居る譯のものぢや無い最うズッと下へ流されて終つてらア何んな女だつたか知ら無いが不憫な事

を致たナ最う些との事で助けて遣るんだつたッけッシテ何だか子供が何うだとか言つて居たような聲が聞えたが親子連れで身を投げたのか知らん夫れなら尚ほの事助けて遣りたかつたと親切と義俠の心に富める熊吉は頻りに身投げを不憫に思ふて獨り言ちつゝ四邊をキョロ〳〵見廻はし居りしが不圖棧橋の杭の先きに何やら白き紙の如きものゝ風に飜々と飜へるを見認めたれば歩み寄つて之れを拾ひ取りしに之れ一箇の半巾なり熊「オヽ之りや半巾だ乾度今ま身を投げた女の持つて居た品に違ひない飛び込む拍子に落ちたのが此の杭の先へ引ッ掛つて殘つたのだろう兎も角乃公が現在飛び込む所を見付けた上に此んな半巾まで拾つた上は是非屆け出なくちや成るまいかナ何うも役所向の事は誠とに面倒で乃公は大嫌だが誰か

連中でも出て來て呉れゝば好い一つ怒鳴つて呉れようカ」と言ひつゝ、聽て大聲を揚げ熊「オーーい誰れか來て呉れんかーー身投げだ〳〵」と呼ぶ聲聞き付けてか裏町の方より靴音高く駈け來りしは夜廻はりの巡査なり、巡「コリヤ〳〵夜中夫んな大聲を揚げて何事カ身投げ〳〵と申しても其方一人りしか外に人は居らんぢや無いカ意外にも巡査の駈け來りしに熊吉少しく狼狽して熊「イエナニ今ま此處に……一人居つたんで厶り升す」巡「何が居つたのカ」熊「何がつて其人間……確かに女で厶いました」巡「夫れが何う致したのカ」熊「夫れが此處から身を投げましたんで厶います」と聞いて巡査も職掌柄、其儘に聞捨てにも爲し難ければ熊吉に事の顛末を取糺して手帳に控え熊吉は姑らく其場に待たせ置いて早速此由を水上警察署に報告し人夫を雇ひ舟な

を仕立てゝ棧橋の上下隈無く網を入れて捜せしも藻屑の外ハ網に掛りて揚るものも無し此時警察署の一人は一同に向ひて警「死骸ハ所詮揚るまい何んと申しても此の激しい引汐に時間でも最つと早ければだが身を投げてから隨分時も經つて居るんだから海へ流されて出て終つたのであろう」繼足の熊吉は傍より詞を添え熊「夫りや全く旦那の仰有る通りです死骸ハ所詮揚りますまい夫に就いても殘念なのハ私が此通りの片輪者だもんですから何うする事も出來無かつたんです若し貴方がたのように立派な足を持つて居たなら夫れといふ間に飛び込んで乾度引き揚げて助けたんですが木で拵らへた足なんていふものハ何蛟に就いて不便利なものでそ」巡「今に及んで夫んな事を申しても初らん默止つて居れ」と叱られて熊吉は口を閉ぢ巡査ハ

此塲の始末書を作つて夫れ〳〵役所に引取り茲に身投の一條も事無く落着を告げたれバ舟子熊吉は太息を吐き熊「アヽ何んお騒ぎに成るかと思つたが先づ〳〵面倒無しに濟んでお目出度い」と正直ものゝ熊吉は今更ら拾ひ取りし手巾にても差出さバ又もや面倒を惹起さんと内懐に納れし儘に急ぎ吾が家に立ち歸りぬ女房お銀れ本夫熊吉の歸りしを見て銀「汝さん足の悪いのに何だつて今時分外へお出成すつたエ」熊吉は眉を顰めて熊「マア夫んなに足が悪い〳〵と言つて呉れるナヨ乃公の足の悪いのは今に初つた事ッちや無かろうぢや無いが何所へも往きや致無い「シーゴル」(瀬船の名)が出帆するだろうと思つたから河岸端をブラ付いて來たんだ」銀「ダつても大層顔色が悪いんぢや無いかチ」熊「ナニ顔色が悪い……シテ見ると乃公も年が老つ

たノ……ナニ何でも無いんだがノ先刻河岸端をぶら付いて那の棧橋の近くへまで往くと棧橋の上に何だか變な人が立つてるよふだから何だろうと思つて段々近寄ると風の吹き寄せて聞える聲が確かに女だ口の中で何うか子供を助けて貰らい度いとか何とか言つて神に祈禱を致て居るのヨ乃公も餘んまり好い心持は致無かつたが兎も角一つ往つて見屆けて遣らうと思つて二た足三足も往くと汝何うだろう身投サ……ドブンと言つて河へ飛び込んだから乃公も此んな氣象だ見逃すことの出來無い男だから駈けて往つて助けて遣ろうとは思つたが今ま汝が言つた通り足が悪いんで駈けることが出來ぬ跛足を曳いて辛つと棧橋まで出て往くと最う駄目だドッドと言つて流れ出す引き汐で何處へ流れたのか薩張り分らんから乃公も餘

ツ證共儘まにして置いて歸ろうかとも思つたが若しや後日に成つて現場を見屆けて等閑に致たおんツて面倒が掛ると不可無いからと思つて大聲揚げて連中を呼ぶと遣つて來たのに巡査サ斯う〳〵だと樣子を話すと巡査に直ぐと水上へ駈け付けて色々手配を爲る其内に人夫も集つて大勢で網を下ろして見たが矢張り駄目サ何處へ流れたか分らず終ひで今まに乃公も戻つて來たのサ」と聞いてお銀も評判の正直者なれバ心に不憫を發えてか銀「夫れや不憫の事を致たテ何處のものだか分ら無いノ」熊「一向に分らぬ」銀「ツシテ汝れ其女を見成すつたのかエ」熊「近寄ッちや見や致ないが遠くから眞黒な影法師丈れ見た何でもマア子供のある若い女のよふだつた」銀「何う致て夫が知れる」熊「サア子供の事を言つて祈禱を致て居た聲が付おんかで考へて

見ると左樣思へるのヨ」銀「マア不憫にテ……夫にしても書置の手紙位ゐ殘して置そうなもんだのにテ」熊「其んな手掛りに成るものハ一つも殘つちや無かつた……オ左樣々々乃公ハ忘れて居たが唯つた一つ殘つて居たものがあつて乃公ハ拾つて來た」と言ひつゝ上衣の内懷より棧橋の杭に掛り居たる手巾を取出し燈火に照らして捻め見しに最と綺麗なる絹の手巾にて其片端に唯だ「花」といふ一字の白き絹糸もて縫取りありたれバ熊吉夫婦ハ顏を集めて熊「シテ見ると身を投げた女ハお花とでもいふ名前だつたんだろう」銀「左樣サテ花といふ字が縫ひ取つてあるからハ何れ夫んな事だろう併し此品も大事に致て納つて置けバ何數の事で役に立つ時もあるだろうヨ」熊「左樣だ〳〵汝に預けて置くから大切にして納つといておくれ」と正直者の熊吉

夫婦は如何なる因縁の纏りしにや花子の身投に深くも憐を感じて何ほ彼れ此れと語り合ひつゝ其夜は程なく眠に就きぬ。翌朝熊吉は疾く起き出でゝ警察署の門前に到り若しや溺死人の掲示もやと凹みし眼張り開いて片端より読み過ぎしも更に記載のあらざれば継足の不自由をも厭はずして何ほ曝屍場にまで到りしが鉄格子の内なる台の上には北海より揚りし黒奴の死体あるのみにて継足の熊吉をしてお花といへるは何所の何者なるやを知らしむ可き手掛とても見えざりければ熊吉も早や之れまでなりと其儘に吾が家に帰り来て斯くと女房お銀に物語り身投の事は之れにて夫婦の心を離れぬ、元来此熊吉と云へるは親切老爺の誉れ高く夫婦揃ひの正直律義ものにて世上一般の船子と異り人を傷み人を悩ましても己れの利欲を図ら

んとする如き不徳の悪心なきのみか濫費を慎み節倹を守りて日毎に幾何づゝかの余財を蓄へて老後を安楽に送らんと既に多少の財産をも積みたりしが不幸にも代を譲る可き子供無く段々年の老ふるに従ひ夫婦頭を集る毎に談話の終りは子供の事にて日毎々々の生活には何に一つの不自由を感ぜぬ身なれど老前短き身の便り少なきを喞ちて夫れのみ心の苦に悩み居りしが或る日熊吉はお銀に向ひて「熊汝は何と思つてるか知ら無いがお互に斯う致て居りや段々年を取る斗りで幾何稼いで金を溜めて見た処が身体が利かなく成つてから世話を致て呉れる子供が無かつた日にや冥途に持ち腐りとも往くめいが金といふ奴ア他人の手に掛けりや直ぐと消えて無くなるもんだ考へで見りや誠どに馬鹿らしいト言つて金が無けりや何は〳〵

心細いし乃公も獨りで色々思案も致して見たが之れといふ好い考も浮んで來無いんで今まで汝にや話さ無かつたんだが何事も相談だお互に手元の明るい中に假令へ赤ン坊でも構は無いから養子を貰ふ巧夫を致して見ちや何うだろう」と言はれてお銀も膝を進め「銀」汝さん眞實に好い處へ氣が付いてお呉ん成すつた妾は取り分け女の事ですもの汝さんよりや心細いのは一倍だから今までも無く相談して見ようかとも思つたが汝さんは未だ若い氣だから何か言ふと老衰れや致まひし夫んな事は早いとお言ひだから實は控えて言ひ出さ無かつたが今まで汝さんから言つてお呉ん成すつたのは願つても無い幸ひだから早速共運びに致升せうヨ」熊」乃公も今までは隨分若い氣で稼いだが掛うとしを取つちや強情も言つて居られ無いから共氣に成つ

たのサ何うか汝心掛けての好い話があつたら早速聞かしてお呉れ」銀「ナニ汝さん心掛けるも何にも入つた話ちや無い汝さへ子を貰ふ氣なら今が今でも呉れ人はあるヨ」熊「何處に有る」銀「那のソラ養育院へ往つて願めバ直ぐだアネ」熊「ウム左樣々々親の無い子なんぞかノ夫りや好い考だ早速にも往つて聞いて見よふぢや無いカ」銀「汝さんさへ都合が宜けりや妾しや今からでも往くヨ」熊「夫れぢや往かふ」と玆に夫婦の相談も纏り熊吉お銀は早速身支度を整へて養育院に至り夫れ〳〵制規の手續を履んで夥多養育され居る孤子を一覽せしが、夫婦は今より一二週間の前花子のお梅が涙の中に養育を依賴せし初子のお力に目を留めて看護婦長に乞ひ此日より吾が家に引き取りて厚く養育せんことを申出でしが不思議なる去れど初めの程は看護婦長

も花子のお梅が愛情を思ひ遣りて許す氣色の見えざりしを夫婦は只管らに頼み入り決して粗末には育てずとの誓言を立てゝ漸やく引取方の許可を得ぬ、此時若者の書記池田甚太郎は此場に現はれ出で、池「其子供を院外へ遣つては少々不都合ちや有り升せんカ」と拒む詞に看護婦長は不審を抱き婦「池田さん夫りや何ういふ譯で」池「何ういふ譯と申して私から那のお梅と申す婦人へ約束致した一言があり升す必らず院外へは出さぬから子供の事には心を措かんで稼ぎ成さいと請合つた以上は若し尋ねて來られた時に面目を失ひ升す」婦「夫りや言つて見れば貴方一個の義理合と申すものでせう此院の規則の上から言へば那時ッ切り今日まで音沙汰も無くて居る以上は最う此子の事は思ひ切つたものと致さなくちや成り升せん左樣何時まで

も此院へ置く譯には參り升せん」池「今日まで音沙汰を致さぬからと申して或は自分の稼ぎに追はれて心ならずも打ち捨てゝ居るのかも知れず今少しは置いて遣るのが慈善の本意かと思ひ升すテ」婦「幾何貴方が左樣仰有つても那の婦人は再び茲へ參り升せんョ夫れとも貴方が强てと仰有るなら貴方自身でお引取に成つちや何うですカ」池田甚太郎は一心唯だ花子のお梅を不憫と思ふ慈悲心より斯く子供の引渡を拒みしものゝ自分は固より少しの資産も無き貧乏人にて辛くも養育院の月給もて其身の生活を支え居る人物なれば中々小兒一人を引取りて養育するほどの餘力あるにあらず花子のお梅が身の上を考へ廻らせば如何にも不憫の情に堪へず如何はせんと姑しは頸を傾けて思案し居りしが軈て熊吉に打ち向ひ池「此子供を連れて歸ろう

とお言ひ成さるのは汝さんかエ」熊吉は腰を屈めて叮嚀に熊「左樣で厶います私共夫婦のものが引取りまして及ばずながら大事に育て度いと思ふんで厶います池「フム左樣か夫れぢや改めて少々汝さんに願ひ度い事があるが聞いては呉れまいか」熊「何んな事かは存じませんが力に及びます事ならば何なりとも」池「外の事でも無いがヂ實は今まで汝さんが引取ろうと言ひ成さる此子の母親といふものは先達つて預けに來た時に能く〳〵樣子を聞いて見ると實に男ながら淚の出る程不憫な女で天にも地にも此子一人りしか血を分けた親身といふは無いのだから少しの間も自分の傍を離し度くは無いのだけれども貧苦に迫つて足手纏を免れる爲めに餘儀無く此院へ預けたのだが歸る時に淚を流して私に賴んだ事がある早かれ晩かれ屹度此子

は連れに參るから何うぞ夫れまでは厄介でも貴方が監督下すつて必らず不都合の無いようにと呉々言つて歸つたのを私は受合つて居るのだ其後今日まで其夫婦は尋ねても來ず此院の規則として引取人が出れば遣らずにや居られ無いから當然あれば私が引取つて其女に義理を立てゝ遣るんだけれども私は此通り貧乏人で此子を引取つても養育する力は無し餘儀無く汝さん方に引渡すのだソコで願ひといふのは外でも無い責めて私が其女への申譯に此子が汝さん方の宅で何不自由無く立派に育てられて居るといふことを平素監督して遣り度いと思ふのだから一週間に一度とか十日目に一遍とか私が汝さん方の宅へ往つて子供の育方を見度いと思ふが許して下さるか」如何なる難題かと思ひの外、最と易き賴みなれば熊吉は心に打ち喜

び熊「エー夫りや況う貴方改めてお頼みも及びません事で貴方の隨意に穢い宅ぢやありますが何時でもお出で成すつて下さいませ却つて私共からお願ひ申し度い位で厶います」といひつゝ熊吉は何心無く懐より過ぐる夜、桟橋にて拾ひ取りし花子の手巾を取り出せば池田は不圖之れを見て痛くも驚きし面色池「オヤ其品が何う致して汝さんの手にありますカ」熊吉は手巾の事に氣も付かず熊「何がで厶いますカ」池「ソ其手巾がサ」熊「へエー此手巾の事で厶いますカ」と冒頭を置いて熊吉は過つる夜、河岸の桟橋より素性の知れぬ一婦人が身を投げしことより件の手巾を拾ひ取りし事まで洩れ無く茲に物語れば聞いて驚く池田甚太郎は後に倒れん計りなり此有樣に熊吉は最とゞ不審に堪へぬ熊「貴方此手巾には何んぞ仔細でも有るので厶いますカ」と

問はれても何は姑らくは返す詞もなかりしが稍ありて池田は太息を吐き池「アヽ何事も世の中は皆な因緣だ其手巾が汝さんの手に入るといふは」といひし儘ま仔細を語らねば熊吉は氣を焦ち熊「此手巾に何んな因緣がありまそカ何うぞお話し成さつて下さいませ」池田甚太郎は容を改めて池「其身を投げた婦人といふは正しく此子の母親です確かに此子を預けに來た時其手巾を所持して居升した自分は土井お梅ぢやと申して居たが花といふ字を白で浮かした手巾を持つて居るのは何ういふ譯だろうと私しは能く〳〵氣を付けて見て置いたら決して見違はありません」と聞いて熊吉夫婦も打ち驚き姑しは三人顔見合せて出す詞も無かりしが漸て熊吉は双手を組み熊「左樣仰有れば思ひ當ります何でも婦人が身を投げます時に神に祈禱を致た

したものと見えて子供を助けてといふ聲が確かに私の耳に這入りましたシテ見りや其子供といふれ正しく私共が今ま引取ろうと願つた此お力に違ひムりますまい之れも神さまのお引合せだ尙ほ〱粗末にれ出來ませぬから引取りました上は一心籠めて育て升す何うぞ貴方も私共の方角へ足の向ひました其節にれは遠慮なくお立寄り下さい升すよふお願ひ申上げ升する」と夫婦詞を同うして池田甚太郎に別を告げ看護婦長に謝禮を述べて初子のお力を懷にしいそ〱吾が家に立ち歸りぬ

第八回

此頃ろ太洋を航海する滊船にして紐育府に入り來るものゝ中最とも船体の巨大なるもの「オーシヨンスター」號と稱し之れに乘込める船長志摩荒夫と言へるは蒸滊機關運轉の術及び太

洋の航海に慣れたること他に並ぶもの無き名人とて英米大陸に其名を轟かしたる人あるが、宛かも花子が惡黨糟谷勇次に追ひ詰められ棧橋より身を投げて憐れ此世を去りし當夜の事「オーシヨンスター」號は同じ滊船「シーゴール」と同時に紐育を出帆す可き約束なりしを船長志摩荒夫の油斷にて機關の準備少しく後れし爲め「シーゴール」號に後るゝこと四五時間の後ち殆んど夜半頃に至りて漸やく紐育府を出帆することゝ成りぬ、甲板の上にれ冬の夜の夜深にも拘はらぞ三四の乘客彼方此方を散歩して頻りに夜景の幽趣を賞しつ興に入れるも道理、河の兩岸に聳ゆる天に突く斗りの大廈高樓れ無數の大窓小窓より五色の燈火を輝かして天國も仙境も斯くやと疑を抱かしむ如何に敏腕達筆の畵工も此美麗と此雅致を寫さん能を持たじとれ或る大

人が紐育府の夜景を賞せし詞にぞある滊船は此眺飽かぬ夜景を後にして次第に海の方に進行し今は「マンハッタン」島を過ぎ「ガバーナー」島を超えて港を去ること數里の沖に至りし時も尚ほ二人りの紳士は濕氣を防ぐ厚羅紗の外套に身を纏ふて甲板を去らず帆檣に釣したる舷燈の下に佇立んで何やらん低聲に語り合へる姿を見れば年齢の頃は何れも三十前後、共に骨相品格の賤しからぬが中にも一人の容貌飽くまで美くしく語り出づる言語の如何にも優に妙味を含めるは問はずと知れし俳優にて相手は森賀重輔と呼び名高き劇場の座元なり森「毛利さん米國での興行は能くも那の樣に片ッ端から失敗が續き升したネ之れに依つて考へた計りでも何うも米國の人は階級が數等下り升すネ毛「貴方のよふに申せば米國の人は丸で話に成ら

んよふに聞え升すけれども失敗する時は矢張り何處でも失敗するものですョ現に貴方は英國でも隨分之れに劣らぬ失敗をお採りに成つた事もあり升すからネ」流石に森賀も少しく詞詰りて森「夫りや貴方失敗を採ると勝利を占めるのは言つて見りや天運ですから強ちに其土地を怨むでもあり升せんが失敗も採りよふ計りでネ澤よく失敗を招くのとずり〲來るのとあり升すからネ…………時に最う十二時過ぎ升した船の規則で何う矢釜しい事でも聞くと面倒ですから室へ這入り升せうか毛「左樣致し升せう併し、お互に心で好む精でそか冬の夜に星を眺めて話を致して居るのは飽きの來ないもので夜の明けるまで甲板の上に立つて居つても陰氣な室へは這入る氣に成り升せんネ」時に此船より先きへ出帆した「シーゴール」は幾何船が小さいと

申しても四時間も前に出たのでそれから所詮追ッ付け升せんでせうナ」森「夫りや無論の事です」と兩人は此時船中の室に入らんとて、舷燈の下を立出で不圖甲板の手摺に身を凭れて海面を打ち眺めしに何やらん水に浮べるものゝ森賀の眼に入りければ驚きながら指差して森「毛利さん一寸と御覽成さい那りやヽア何でせうカ俳優毛利も頸差し延ばして毛「何處ですカ」森「那の船の横手の處に眞黒なものが浮いて居り升す此の指の見當を御覽成さいと詞に從つて毛利は森賀の指差せし見當に瞳を定めしに如何にも怪しき物体の見ゆれば毛「成る程變なものが流れて居り升すナ」といふ中、滊船は今や充分の馬力を發して矢を射る如くに進行し居れば間も無く件の浮物を横に見て通り過ぎんとせし途端に帆檣ある舷燈の光りキラリと浮物の上を照

らしたるを見て毛利森賀の兩人が仰け倒るゝまでに打ち驚きしも道理、浮み居る怪しき物体は破れし雞籠の如きものにて其を枕として僅かに肩と頭を現はし出せるは紛れも無き婦人の死体なり兩人は一時に聲を立てゝ「人が海へ落ちて死んで居る――」と常ならぬ一と叫びに船長は何事の起りしならんと直ちに機關運轉の停止を號令せしと同時に第一着に甲板に飛び出で來りしは巡夜の役員にて夫と聞くより船長室に駈け込んで巡「雞籠のよふなものを枕にして女の流れて居るのが見え升す」と注進に及べば船長に先だち顏色變へて驚きしは此時船長室に來合せ居りし二三の紳士貴夫人なり長「貴方がたは些ともお驚き成ざるに及び升せん何にも仔細のない事です只今詳しいお話を申し升す」と慰め置いて船長は其儘に甲板に出で來りぬ、

幾多の乗客ハ甲板にての叫び聲といひ滊船の進行を停止せし事といひ何れにしても由々しき一大事の起りしならんと思へハ船長の制するをも聞かで吾も〳〵と甲板目掛けて押し上れり甲「今まで叫んだ聲ハ何だつたろう誰れが甲板の上で喧嘩でも初めた末に斬り合ひでも致したのかあ夫れなら何所か此所へ等に死骸でも倒れて居そうなもんだ」乙「ナニ左樣ちやあい婦人が何うだとかいふ聲が聞えたから屹度ナンだろう紐育で財産家の娘か何蚊が自分の慕つてる男と一所に成ることが出來ないのを苦に病んで死のうと決心ハ致たが市街に近い所へ身でも投げりや直ぐ死骸が揚つて死んだ後で惡く評判を立てられるのが嫌だといふで旅行する振りで船へ乗り込んで此海へ身を投げたのだろう」丙「イーエ左樣ぢやア狂人の女だそうだ」と囁き

甲板に集り來りし數百の乘客ハ彼邊此邊に群を成して思ひ〳〵の想像を語り最とゞ混雜の有樣なりしが此時船長の命令に依りて照らしけん一と基の電氣燈忽焉として空中に輝やき其光りハ赫々として太陽に異らねバアット驚く群集の乘客ハ一時に海面に振り向ひて籠を枕に流れ浮べる婦人の死体に眼を注げバ憐れ色こそ青醒めて稍や凄味を帶びたれ天然の美貌ハ失せも遣らで宛かも口を開いて人に助けを求むるが如くに見えぬ

第九回

滊船「オーシヨンスター」号は既に機關の運轉を停止したれば少しく波に搖るゝのみにて進退せざれども海面に浮べる婦人の死体は漸次に波に送られて沖の方に流れ出づれバ甲板に群がる

る乗客中にて婦人は同性相憐れむの情よりしてか頻りに呼び立つる聲の聞ふ女「未だ死に切つては居らぬ様子だから遠くへ流れ出ぬ中ち早く揚げて遣り度いもんだ船長志摩荒夫は此時諸般の準備整ひしにや水夫に向ひて長「一番の短艇を卸ろして呉れ死体を引揚げろのだから」と命令の下に水夫は短艇を卸ろす船長は水夫六名を引き連れてこれに乗り込みて一直線に死体の浮べる處に漕ぎ付け之れを引き揚げて本船に立ち帰り取り敢へず甲板の上に一枚の毛布を敷ひて横に置きしが婦人は呼吸の絶へしに相違無きも全身毫も水脹れし所の無きは通常の溺死人におらずと見へぬ死体を甲板に引き揚ぐるや黒山の如くに取巻ける乗客の男女は口々に女「オ、可愛らしい女だ些とも死んで居るよふでは無い様で眠つて居るよふだ早く身体で

も煖ためて療治して遣つたら息を吹き返すかも知れ無い誰れかお醫者は居無いか知ら男「未だ丸で子供だナ辛つと十六か十七位おもんだろう男「ナーニ左様なもんか何うしても十八九……事に依つたら二十才越してるだらう何しろ女が好いから若く見へるけれども子供の一人位ゐ確かに産んでるだろうナ男「死んでるのかナ未だ生きてるのかナ」男「無論死んでるのサ若しも生きて居たら大層なもんだ」とガヤ〳〵評し合へる中に船長は二人りの水夫を呼び船「オイ甚助、平蔵此處へ來て此女を明いて居る寢室の靜かなお方へ入れて置いてお醫者に直ぐと來て下さいと言つて呉れ」二人の水夫は其命令に從つて婦人の死体を運び去りしが乗客の一人は船長の前に立つて客「船長貴方の考は何うです今の婦人は助かろうか助かるまいカ船「何ーも私

にも分りません一旦沈んだのが浮いて出たのか夫れとも此寒さですから初めから浮いて居て凍えたのか其邊は醫者で無けりや分りますまい併し見た處が些とも水脹れて居ませんから溺死したものでは無いかも知りません」客「夫れなら治療の仕方一つで助からんとも言へませんナ」長「左樣……何とも言はれません」客「何うだろう自分で飛び込んだものでせうカ或は船でも覆沒したので那の籠に取り着いたものでせうカ」長「船が難破した場合などに浮いて居る物へ取り付いたものは男女に拘はらず仰向けに成つて流れて居るのが通例ですが今の婦人に限り仰向けに成つて流れて居た處を以て見れば自分で飛び込んだにや違ひムいますまいケレども幸ひにして下に籠があつて溺れ無い前に浮き上つたものでムりませうナ」傍に在りし森賀重

輔詞を添へ森「兎にも角にも那んな死体の流れて居つたのは珍らしうムい升すナ」長「左樣です私しは數年此海を通ひますが斯んな事には初めて出逢ひ升した」軈て甲版に群り居たる夥多の乘客も次第に減じ自分の室に歸るもあれば又た死体の跡を追ふて寢室の方に赴くもあり死体の發見者たる毛利、森賀の兩人も他の乘客と共に發見せし當時の有樣など彼此れ物語りつゝ甲版を下りしが其後一時餘りの間は船中往く處として此事、人の口を去らざりき森賀重輔は自分の室に歸り來て乘合の一紳士に打ち向ひ森「何うでムいませう最う醫師も診察を遂げたでムいませうから治療が屆くとか屆かぬとか知れそうなものでムいますナ」と言へば紳士は鼻に掛け居たる眼鏡を外づして衣嚢に入れ紳「醫師は診斷致したそうで」森「何と診斷致したか御承

知に成りませんか」紳「今ま一寸と聞きましたが治療は届かぬ事も無いそうです吾々の目には見えませんが何所か体内に温氣を含んで居て見込はあるが何分數時間呼吸を絶つて全く知覺を失つて居た事ですから屹度助かるといふ事は保證が出來ぬとか申すことです併し之れも醫師より直接に聞いた人ちやありませず傳聞ですから當には成りません」と乘客の多數は船中の徒然よりか但し自然に不憫の情を感じてか皆な婦人の生死如何を心に掛けて或は醫師に就き或は船長を尋ねて治療の成行を心配し居たるが二度目に森賀が耳に入りし報知に依れば婦人は漸次に蘇生の兆候を現はし、尚ほ油斷は出來難けれども治療と看病に怠り無ければ十中の八九は再び呼吸を吹き返そ可しとの事に海中に漂ひて何れの何者なる事やも知らぬ婦人

ながらに森賀は喜びの色を浮べ心を安らげて眠りに就きぬ此方の一室にては汽船付の醫師、頭に雪を頂くまで幾千万の患者を手に掛けて治療の術にも熟練し殊には篤實仁愛の老翁なれば婦人の美くしくして罪なき容貌に口こそ開かね吾に救助を求むるの色あるを見ては泣き入るまでに憐れを感じ、乘客中に醫師ありて吾が手を助けんと言ひ出でしを幸ひ件の一人を相手として婦人の治療に其夜を明かしたり乘客の醫師は中頃ろ老翁に打ち向ひて醫「貴方のお見込は何うかも知らん、が之りや到底不可ませんか老「イーエ貴方が何と仰有つても心臟に幾分かの温氣を保つて失れぬ中は見離す譯に參りません此んな實例は之れまで幾何もありますから」と如何に言ふとも老翁は頑として少しも動く氣色なかりしが不思議なる哉姑らく過ぎて婦人は

心臓に少しの皷動を初め幽かに脈搏の響きを感ずるに至りければ乘客の醫師ハ翁が見込の鋭きに驚いて醫「成程恐れ入りましたこれならバ屹度蘇生を保證されます今ま姑らく經てバ全身に血液の循環するでムいませう」事を輕卒に斷ずるハ醫師の最とも誡むる所なるが流石に老翁ハ心沈着けて前後を考へ老「併し安心ハ出來ませぬ斯う成つてからが危險です假令へ呼吸ハ吹き返した正氣に立ち歸つたとハ申しても非常なる大病を惹起せバ所詮助かる氣遣ひムりません之れあらは夫を防ぐの手段が肝要です」醫「併し最う少し位ハ呼吸を初めて居るでせうナ」老「イヤまだ〳〵夫んな塲合に至りません」と老翁ハ一人を相手にして腕に覺えのあらん限り治療を尽して怠り無かりしが共中次第に夜も明け渡りて今ハ洋燈の火を消す頃と成りければ

翁ハ小やかなる鏡を取出して婦人の口先に挿し姑らくしてこれを撿めしに鏡の面に聊か斗り露の置きしを見て老翁は莞爾と打ち笑み稍や安心の色を現はしぬ醫「此機會に乘じて激心劑を與へて見てハ何うでせうか」老「至極宜しいでせう」と初めて老翁の賛成を得たる乘客の醫師ハ藥瓶を飾りし棚の方に馳せ寄つてブランデイーの瓶を持ち來り洋盃に注いで婦人の口を割り其幾部分を喉に注ぎ入れしが内に吸ひし幽かの息と同時に聊か斗りのブランデイーを飲み込みしを見て老翁は痛くも打ち喜び老「モー大丈夫です」と言ひながら又も十滴斗りのブランデイーを注ぎ込みしに之れまた程無く喉を通りしにぞ二人の醫師ハ茲ぞと互に秘術を尽くし血液の循環を導く爲め頻りに婦人の身体を撫で擦りしが姑らくして再び呼吸し又た姑ら

くして三度び呼吸を爲そに至りたれバ老翁ハ又もや少許のブランデーを注いで飲ましめしに呼吸ハ漸次に頻繁と成り心臓も漸やくにして正しく皷動じ初めたり去れバ兩人の醫師は最早や氣遣ふ事も無しと厚き毛布を持ち來りて婦人を包み姑らく其樣子を窺ひ居りしに一秒毎に血液の循環も速かに成り今まで藤色の如くに變じ居たる婦人の面も稍や血色を帶び來りぬ此時室の入口靜かに押し開いて最と心配そうに入り來りしハ船長志摩荒夫と五六名の乘客紳士あり「長何んな塩梅ですカ」老翁ハ起つて船長の前に來り低聲に成り「老非常に好く成りました「長助りますカ」「老既に助つて居ます併し今ハ一番大切の所ですから最とも靜かに致て置かんと變動が恐ろしう厶ります」と入り來りし人々を靜め置いて老翁ハ再び坐に直りしが婦

人ハ漸やく呼吸の繁く高まると共に面色も亦た大いに回復したれバ老翁ハ其脉搏の度を窺ハん爲め手を差し延ばして婦人の手頸を握りしに此時初めて正氣に立ち歸りしカ婦人ハ握られし手頸を振り離せしが此有樣を見て船長初め婦人の生死を心に掛け居たる五六の紳士ハ全く安堵の思を爲し長居ハ却つて病人に妨げあらんと打ち喜びてぞ立ち歸りたる室の戸の閉まりし音に驚きてカ婦人ハ細き目を開いて居並べる醫師兩人の顔を見廻ハし其儘又も目を閉ぢて眠に就けり斯く正氣に歸りし上ハ最早や他に心配す可き所もなけれど唯だ老翁の胸を悩めしハ婦人の兩脚にて膝より上ハ既に血液も循環して温度を増せしも膝より以下ハ永く海水に沈み居たりし故にや今に至るまで冷え却りて神經の作用を及ぼさゞれバ頻りに小頸

を傾けて治療の術に心を碎き居たり此時婦人は又も目を開いて室内を見廻はし口を動かして何やら言はんと欲する樣子なれば老翁は初めて詞を掛け老「何んな心持が致して居るか」と問へども婦人は僅かに口を動かすのみにて聲を發せず老「聞えぬカ未だ聲が出無いのカ私は汝を助けて遣つた醫者だ決して驚くことはないから、氣を靜めて居るが好い無理に聲を出すのは好くないから」と諭せど婦人は何やら口を動かして低聲に語り居る樣子に老翁は早くも心付いて口元に耳を寄すれば「此處は何處だ」といふ聲も糸の如く幽かに老翁に通じたれば老翁は詞優しく老「オ、分るまい此處は、「オーションスター」といふ汽船の中だ汝が海に流れて居たのを引き揚げて漸々の事で之れまでに助けて遣つたのだ此船は英國の「リバープール」へ往くのだ

から若くまでには汝の身體も好く成るだらう」と聞いて驚く病人が苦しき目を見開いて詞も無く唯だワナ〳〵と震ひ居るも無理ならぬ此婦人こそ過ぎつる夜、舟子熊吉に紀念を殘して故鄕紐育にて身を沈めたる花子にて其身に巣くはる人世の惡魔は未だに去りも失せぬと見え既に冥土に旅立んとして生き回ること茲に二度嬉しと思はで怖るゝは花子が心の病にあらず、今より英國に渡りて後は花子如何なる境遇をや行かん

第十回

溺死美人の生き回りしと言ひ傳ふるや「オーションスター」号の船中にては又もや評判に花を咲かして兩人頭を突き合はすれば話を此事に持て來らぬは無かりしが中にも死體の發見者森賀重輔と俳優毛利三幸は翌日甲板の上を散歩しながら森「毛利

さん昨夜の美人が話の出來るよふに全快したのを見たいもんがですネ夫れも決して色慾に迷ふてといふ譯ではわり升せんが屹度腕の立つ女だろうと思つてネ」俳優毛利は笑ひながら毛「左樣仰有つてもネ森賀さん貴方は現在の俳優でさへお見損なひがあるぢやムいませんか夫れを死んで居るのを見て腕がわるだろうと仰有るのは些と不承知ですネ丸で聲も聞かず動作も見ず目付も知らん女を捉まへて」森「ケレどもネ那の美しい容貌といひ那の年格好は其儘ま女俳優として恥かしく無い美人ぢや有り升せんカ」毛「美人は美人でせうけれども俳優は又た別段のもので何分が腕に覺へが無くては役に立ち升せんからネ貴方の事だから申上げるまでもおいが迂乎して役にも立たぬものを脊負ひ込んぢや不可升せん」森「ナニ大丈夫です少し

私は考案がわり升す」と其身の素性を知らぬ森賀、毛利の兩人は彼處れ花子が事に就き談話に時を移し居りしが此時滿天雲を漲らして俄かに水雪の降り來りければ兩人も匆々甲板を下りて自分の室に閉ぢ籠りぬ、斯くて明くる日も其明くる日も雨にわらざれば雪、雪にあらざれば雨と殆んど止み間も無く降り續く冬の天に乘客は一人として室を出づるとのあく皆お徒然を慰めんとて或は書見に或は遊戯に只管ら天の晴れ渡を待ち居りければ船内も何處と無く靜かにして救はれし病人花子の爲ためには却つて仕合を與へければ五臟の働きも次第に強く身体の衰弱も日を追ふて回復し四日目五日目の頃には体温も常に復して歩行も自由に早や服藥までをも廢して唯だ滋養品に身を肥やすのみとは成れり丁度六日目の朝降り續きたる雨雪も

過んで天の際涯なく霽れ渡り風さへ暖たかに春めきて最とゞ長閑けく覺えられしに甲板好の森賀重輔は早朝より起き出でて茫々くたる太洋の朝景色に六月の欝氣を散らし居たるが不圖大帆檣の左手より風に飜へりてチラ付き見ゆるものあるに身を替はして透し見れば自分と同じく帆檣に身を凭たして朝景氣に心の憂きを洗らひ居る婦人なり森「今日は私しが第一着だと思つて居たが婦人に魁されたは殘念至極だ」と獨り言ちつゝ廻ぐり來つて婦人の横手に現はれ出でしが何處やら顏に見覺えのある婦人なれば少しく離れて詞を掛け森「大層お早うムい升すナ此頃の雪天に引き替へて今日は久し振りでお天氣に成り升して氣分が清々く致しまそ」と詞を掛られて件の婦人は驚きながらキット森賀の方を振り向きしが手に持てる手巾にて顏

を掩ひ又も其儘に横向けり此時森賀が正面よりチラリと眺めし容貌は色少しく青白くして兩眼にこそ涙を含め其口元といひ鼻筋は通り此處ぞと非難す可き所無き美くしさに必らぞ見覺えのある婦人と頸を捻つて考ふれども俄かに思ひ出でぬも無理ならぞ之なん森賀の發見して難船に助けられて蘇生したる美人花子なり死体の顏を見たるのみにて生き回りて數層の美を増したる花子に逢ふては心付かざるこそ當然なる可し森賀は自分の掛けし詞に對して婦人が一言の返事を與へぬに全く吾れの思ひ違ひにて知らざる貴夫人を辱かしめしならんと腰を屈めて再び詞を掛けて森「只今は貴女に對し誠とに失禮を申し上げました實はお顏を間違へまして私の知つた方だとのみ考へて粗忽に詞を掛けました段は平に御容赦を願ひま

す」花子の貴夫人は何ぼも詞無く唯だ頭を動かして挨拶するのみにて森賀に顔を見らるゝことの恥かしさにや但しは目に持つ涙を見せじとにや手巾顔に押し當てし儘ま再び此方を見向きも爲ねば森賀は心に不審ながらも一と先づ此處を立ち去らんと二足許り歩みし時、不圖死体美人の事に心付き「森「ウム左様だ那女に相違無い成る程生き回つて見りや那れ位ゐ美人だろう外では分らぬが那の口元と身の格好で知れる若し間違つたら百年目だ大膽に聞いて見よふ」と心の中にて問答しつゝ又も元の處に立ち歸りて「森「度々青細い事を申しまして恐れ入りますが貴女は此間出帆の夜に私共が見付けた御婦人ぢやムいませんですか」と言はれて花子は驚ろく胸を押し靜めて「花「ハイ左様でムいます」と答ふる聲も涙に曇りて定かならず「森「アヽ隨

かに左様だと存じましたが先づ〳〵お目出度い事でムいました實は私は演劇の座元を致して居るものですが毛利三幸と申す知名の俳優と同道で米國へ渡航致して大失敗を招いて今ま歸國する所でムいますが先夜出帆の折、毛利と兩人で甲板の上に立つて失敗話など致して愚痴を溢して居ると眞う闇い海の上に何だか變なものが浮いて居るよふですから段々氣を付けて見れバ見るほど不思議なんで其中に船が進むに從つて舷燈の火がチラリと映したるを見ると死婦人のよふですから騷ぎ出して船長が短艇を卸ろして漕ぎ付けるなんといふ一時は非常の混雜を極めましたケレどもマア其の効がわつて斯う致してお目に掛つてお話し申すよふに成つたといふは實に天の賜でムいます」と森賀は花子の歡心を買はん爲め詞巧みに物語れバ花子

も今は默し兼ねて心の悲しみを押し隠して花「賊とは思ひ掛けもない御高恩に預りましてお禮の申上ようもムいません其時若し貴方が甲板の上にお出がなければ妾しは魚の飼食と成り果てました再び此世を見ることが出來ないのでムいました」と死することそ吾が心の願なれ助けし人は吾れに苦しみを與ふる人ありとは花子も具逆に言ひ兼ねて胸に泣きつゝ表面に喜びの色を飾れるとも露知らぬ森賀重輔森「私共に左樣お禮を仰有つて下さると却つて恐れ入ります私共は唯だ夫んな好い機會に臨んで居たといふ丈けな話で何事も神の御蔭でムいます夫れはマア何うでも宜しいそして貴女のお身体は何うですカ最う全くお快くお成りでムいますか」花「ハイお蔭さまで何うやら斯うやら元の身体に成りましてムいます」森「夫れはマア何より結

構な事でムいます時に貴女は何う致てマア海なぞへ流がされてお出に成つたのでムいますカ乗つてお出で成さつた船では沈んだのでムいますカ」と問はれて花子は其胸の轟ろくと同時に顔色も一層青く成りしが吾が身の秘密を悟られじと面を繕ひ花「お察しの通りでムいます」森「大抵夫んな事だろうとは察して居升したが夫にしてもマア都合能く籠の上へお身体の乗つたといふのが貴女の運の強かつたのでムいます……何れ船の沈んだのでありますれば外にもお連が有つたでムいましたろうが些とはお助かりに成つた方もありますかナ」花「イーエ最う一人も殘らず皆んな死去つて終ひまして此世に妾の親族といふものはムいません」森賀は眉を顰めて悲しみの情を表し森「オヤ／＼左樣でムいますカ聞けば聞くほどお氣の毒さまな事

でムいますナ私のよふなものでも之れをは縁に幾久しくは親密に願ひ度うムいます及ばずながら出來ます限りは貴女の爲めには尽力を上げる積りです失禮ながらは名前は何と仰せられますかと問はれて花子は姑し躊躇の後ち「和田光と申し升る」森「エヽ貴女は和田光子さんと仰有り升す……能く〳〵演劇には縁が……那の和田晴光女史といふ有名な女俳優がムい升すが若しや貴女が其……と言はんとするを遮りて光「イーエ妾しの事ではムり升せん共かたは全く別人でムい升す」森「夫れでも貴女が和田光子さんと仰有る以上は多少演藝の道へお這入り成された事もあるでムい升せう花子の光子は落ちんとする涙を半巾にて拂ひ光「有ると申上げ度いのでムい升すが妾は誠とに無器用ものでえんな高尚な事は些とも存じて居り升せん」有

ると申上げ度いがとの一言を森賀は遠慮の詞と聞きしか左無くとも自分に深く見込みし事のありてなるか更に詞を改めて森「兎に角私は此の通りの無作法ものでして詞を飾つて何う斯うと申すことの出來ない人物でムい升すから何事も私の心に思つた丈け正直に申上げる精神であり升すが今まお話を承はつた處では親族もお死去りに成る貴女一人りで此世にお殘りに成つた事ですから若し之れから先の一身に御心配でもあるよふですれば一層女俳優にお成り下すつちや如何です」花子の光子は固より故無くして死を決したるものにはあらず願くは生き永らへて娘初子の成長をも見且つは一度び春雄にも面會して身の行末を謀らん心の胸をも裂かん斗りなれども柔弱き身の哀しさには適當の職業なく去りとて德義を穢し貞操を破

つても何は其性命を繋がん心の無き儘まに止むなくして死せんと決心せしなれば今ま再び救はれて世に出でし上は何がな身に適ふ職業を得て最愛の初子、葬へる春雄にも運り合ふの機會を得なば花子が爲めには之れに增したる幸福やある可き森賀の勸告に花子の光子は始し思案の後に決心を明かして光「ハイ色々御親切さまに有り難う存じ升す御察の通り妾は獨りで此世へ殘されて財產も無ければ相談相手に成つて呉れ升す人もなし最う今日からして自分一身を立てる方法も存じ升せんで途方に暮れて居る處でムい升すから若し妾の身に適ひ升した職業があつて夫で一身が支へて參られるのでムい升れば何んな事でも致す心得でムい升す」森賀は此詞を聞いて深くも心に打ち喜び森「決して御心配成され升すナ私がお付き申して居

る以上は貴女に御不自由はお見せ申し升せんから………見れば見るほど美くしい貴女の御容貌といひ又たお聲の調子から身の振りこなし………私は英國へ歸つた上で屹度劇場で大喝采を得てお目に掛け升す」光「何分とも宜しきよふお願ひ申し升す」と花子が承諾の詞を聞いて森賀は鬼の首にても得し心持にて甲版を下り自分の室に馳せ歸りて最と誇り顔に右の顛末を毛利三幸に物語りしに引き替へ花子の光子も續いて吾が室には立ち歸りしが鬱々として樂む色なく獨り寢臺の柱に身を凭たして初子が事を思ひ初めて涙に袂を潤しぬ

第十一回

話題一轉、米國紐育府の裏町なる舟子熊吉の居宅にては唯だ一基の瓦斯燈の光に廣く締りのなき室も朧ろなる中に此の日樣

育院より引き取り、歸りし生嶋花子が最愛の娘初子のお力を夫婦の間に抱き合つゝ熊「此子は碌々物を食れないで居るものと見へるノ不憫に」銀「左樣サネー餘ッぽど食慾がつて居る樣子だ」熊「養育院なんていものも迂乎り當にや成らねいもんだ赤ン坊なんどを何んな事に取扱ふか知れたもんぢや無い」銀「左樣お言ひだけれども養育院で育つた子は皆んな怜悧だとサ」熊「何んぼ怜悧に育てるツたつて物を食れせ無いで置く奴があるものか此の具合ぢや食慾がつて泣きでもすりや赤ン坊の頭の一ツ位は毆ち兼ねや仕無いぜ」銀「眞逆に夫んな事は致無いだろうが物を澤山食べさせない丈けは眞實らしい」熊「早く乳を拵へて飲まして遣れ不憫にと熊吉夫婦は宛かも掌の内の珠の如く愛で育つるぞ殊勝なるが銀は此日買ひ來りし乳呑器械と牛乳の罐を

取り出して程能く解したる乳を飲ましながら熊「オー〳〵那の喜んで飲むのを見ねへ可愛らしい口を、致て」銀「左樣だネー子供は眞實に罪の無いもんだ此んな可愛らしい子供を無慘々々手離して養育院などへ遣る親達の氣が知れ無い」熊吉は身を投げし女の事を思ひ出して熊「ダッて夫りや致方が無いやナ親だつて何も此子が可愛く無いから何う成つても好いてい了見ぢや養育院などへ持つて往きや致無いぜ汝も知つてる通り此子の親といふのは仰引ならぬ事に逼つて身を投げる程の不仕合ものだろう此子が可愛いと思へばこそ人手に渡しても助けて置かうてい了見に成つたんで可愛く無いと思や抱いた儘で一所に河へ飛び込むワ」銀「夫りやマア夫んなよふなもんだ併し考へて見りや身を投げるのを汝さんが見付けた親の子を斯うして

妾共が引取つて育てるよふに成つたといふのも能く〱不思儀な因縁だネ」熊「乃公が丁度其場へ行合つたも矢張り那の女が此子の事を乃公に頼んで死んだのかも知れねい」銀「夫んな事でゝもあるだろう兎に角此子は妾共の氣にも入るし夫んな因縁があつて見りや決して粗末には育てられ無いヨ」熊「粗末になど育てられて堪るものカ何んな因縁があろうとあるまいと乃公達や此子を目當に稼もそりや年も取るんで此子の無病で育つ顔を見るより外にや何にも乃公達の樂は無いんだ」銀「ホンに左樣ですヨ」熊「夫れにしても那の養育院に書記を勤めて居た男は感心なもんだノー」銀「那の池田とかいふ若い人ですカ」熊「左樣ヨ那の若い年齢で自分の子なら兎も角だが初めて見た人の子を那んなに可愛がつて大切にしてるていのは仲々出來無い事つた」

銀「何故……年の若い人だから必竟此子を可愛がるんぢや無いカ夫りや那の人は惡い人ぢや、些とも無い若い人にしちや珍らしい親切な人だけれども若し那の人が汝さん程年を取つてる人だつたら那れ程にや此子を可愛がら無いヨ」唯た一心に初子のお力を愛し居る熊吉に取りてはお銀が今の詞わ少しく胸に當りしと見へ」熊「分らねい事をいふぢや無いカ可愛がるに二つがあるカ」女房お銀は笑ひながら銀「夫りやネ汝さんのよふな若い時分から堅儀を守つて道樂した事の無い人にや分ら無かろうケレども妾の考へぢや那の人が此子を可愛がるのはホンの付け合せだろうと思ふそして本尊さまは此子の親だに其證據には那の時汝さんが此手巾を持つて居た女は身を投げて終つたんだと言ひ成すつた時に池田といふ人の顔色の變つたこと丸る

で與吉に成つて終つたヨ」正直なのゝ熊吉は小頸を傾けて「熊成る程汝が左樣言や變な顏付を致たッけノ―併しマア人の事ア何うでも好いや乃公達さへ此子を大事にして遣りや身を投げた親も安心して往生するだろう此時初子のお力は與へられし乳を飲み飽いて器械の乳頸を離しスヤ〳〵眠に就きければお銀は起ち上り毛の柔かき毛布二三葉を持ち來りて新調の小寢臺に敷き詰め聽て子供を共上に寢かして夫婦其傍を離れず餘念も無く子供の寢顏を見てあれば何に感じけん子供は眠りし儘ま最と快よ氣に笑へるを見て熊吉はホク〳〵打ち喜び「熊一寸いと此笑つてる顏を見や可愛いぢや無いカ……オヽ不斷に笑つてるが何うか致たんちや無いカ」「銀ナニ何うも致るもんかヲ赤ン坊の中は寢さへすりや夢を見て笑つて居るヨ」「熊ナニ子

供を持つたことも無い癖に……」「銀持た無くたつて女だもの夫れ位の事は知つて居るヨ」「熊ダヤ何んな夢を見て笑ふんだエ」「銀夫んな事までは知ら無いヨケレども能く言ふぢや無いか赤ン坊が寢ると神さまが連れてお遊び成さるんだッて」「熊馬鹿な事を言へ」「銀汝さんが分ら無いんだ子供は神さまが連れてお遊び成さるにや極つた事サ聖書の中にもあるぢや無いカ(汝等幼き子供の如く成らざれば決して天國に上ることを能はず」と妾なんぞは始終會堂へ往くから能く覺えて居るヨ」「熊夫んな六ケ敷い事ア乃公にや分ら無いが夫んな氣樂な神さまも無いもんだ」と熊吉夫婦は引取りし子供の愛らしさに永き冬の夜話にも短き晝の稼の隙にも初子が事のみ言ひ出でゝ産みの親にも勝りし寵愛を神ならぬ身の花子の光子は遠く太洋を距てゝ異郷に渡

り性命に替へし娘初子が生死の程も知るに由無く日夜其胸を悩まして涙の乾く隙無きぞ是非も無き斯くて二週間を經過せしに初子は段々に成長して其可愛さも次第に増しければ熊吉夫婦の寵愛も日々に厚く二人り爭ふて膝に抱き上げ頬を撫で頭を擦りて老の心を慰めぬ熊「お銀や此子に一つ好い名を付けて遣り度いノ」銀「何故名前好いのが付いてるぢや無いカ」熊「夫りや知つてるがノ又た乃公達で名を付けて遣りや一倍可愛いかろうと思つてサ」銀「ナニ好いぢや無いカ土井お梅といふ可愛らしい好い名があるんだもの」熊「ケレどもノ人間の名前ていものは誠に大事なもんで名前が悪いと一生涯出世し無いといふ位なもんだから實は乃公も取り替へて遣り度いと思ふんだ」銀「お梅といふのは悪い名前なのかエ」熊「ナニ左様ぢや無いが此子

の親の事から考へて見るとお梅といふ名前の付いてる以上は何う致ても身投を致たもんの子だといふ悪い名前が付いて廻るだろうと思つてサ」女房お銀は針を持ちし、手を休めて銀「夫も聞いて見りや道理だが又た考へて見ると若し此子が成人した上で親戚のものでも此世に殘つて居つて何うぞお梅に逢ひ度いもんだと尋ねても名前が變つて居て見りや容易にや知れず却つて此子の爲めに不憫だろうと思ふテ」熊「サア夫れだ乃公は其尋ねて來られるのが嫌なんだ尋ねて來て見ろ元は養育院から引取つた子で乃公達の拵へた子で無いからヒヨツと又た手離そよふな事にでも成ると今までの苦勞が何にも成らぬ斗りで無い悲しい思を致無くちや成らねいからノ仮令へ母親は身を投げて死んだからッて先づ後に父親が殘つてるものと思い

無くちや成らんから」銀「夫も左樣だ汝さんの考通り何か好い名前を撰んで取り替へて遣ることに致しよふヨ」と夫婦の相談も纏りて愈々初子は三度び其名を變ずることゝ成りて二日三日を經ちし時、養育院の書記池田甚太郎が熊吉の宅に尋ね來りければ夫婦は幸ひと池田に向ひ右變名の事を物語りしに池田は血相を變へて反對し池「汝さん方は夫んな亂暴な事を致しちや不可無いぜ」熊「何故で厶いますか」池「何故と言つて私などは若くても少し昔弊の方だから祖父さまや祖母さまの誡は堅く守つて居るが子供の名前は滅多に取り替へるものぢや有りませんゾ恐ろしう壽命を縮めるといふ事です」との一言を聞き固より正直ものゝ熊吉夫婦殊に舟子仲間の常として上古よりの言ひ傳へなど言へば神の如くに恐れ居るゆゑ今更ら自分の過を悔る呆

然として詞無かりしも憐れ、

第十二回

「オーシヨンスター」號が數日間の航海を終りて無事英國リバープール」港に到着するや否や森賀重輔は全英國の大小新聞紙に左の如き廣告文を掲げて大言を放てり

再生の美人新女俳優　和田光子孃

演藝世界に比類無く美貌天下の人目を驚かす可しと知られたる和田光子孃は今度弊座の求を容れて初めて舞臺に上らるゝ事と成り不日開場仕候間此美貌と此妙藝とを觀落して後悔無之樣預じめ大方諸君に廣告仕置候也

龍動府　ドルリーヽレーン座

右の廣告文を掲げ置いて森賀の一行は米國にての失敗を此一

興行にて盛り返さんとの大望を抱き其儘ま龍動府に立ち歸りて開場の準備に取掛りしが狂言は當時全世界の老若男女をして涙の雨を灑がしめたりといふ好評の人情話「闇迷美人酒子別」と極り俳優毛利三幸は夥多の門弟を集めて稽古に掛り座元森賀重輔は劇場内外の雜用に終日腰も座はらざりしが漸やく準備も整ひて少しく隙の出來ければ一日毛利は森賀の事務室を訪ねしに森賀も幸ひ内に在り森「ヤ誰殿かと思つたら毛利さん折角お目に掛り度いと思つて居升したマア此れへお掛け下さい」と椅子引き寄せて勸むれば毛利三幸は腰打ち掛けぬ森「毛利さん、貴方は何う思つてお出で成さるか知りませんが私しは今度の一と興行で英國人の膽玉を拔いて遣る考へなんです」毛利は笑ひながら毛「併し森賀さん餘り大仕掛けな事は致さん方が宜う

ムいますヨ大仕掛けに遣ても當たつて來れゝば大きいが一つ間違つて失敗すれば從つて大きうムり升すからナ」森「勿論私だつて無鐵砲に大仕掛けな事を遣り出す考はありませんケレども先夜も貴方お仰有つた通り那の美人が案外の好いものですから是非とも大仕掛に遣ら無けりや成らぬよふと成つて來升す」毛「サア其處ですナ成る程好いにや違ひはムいますまいが何と言つても初めて舞臺を踏むのでそから幾何か之れで狼狽へる傾きがありますからナ」森「イヤ夫れは私が保證します中々膽力は据はつて居ますヨ」毛「左樣申しては誠とに失敬ですが貴方の保證も何うかすると外れることがあつて此間の米國行見たよふな事も無きにしもあらずですからナ」森「毛利さん其米國行の事はモウ言ふのを止めて下さい夫を言はれちや一言無いケ

レども今度丈けは私失敗じ無い積りです又た今度失敗した日にや大變な事が初まります早い話が私の財産の殘りといふものは皆んな注ぎ込んで其上に彼此れ六千圓近くも借金したのですから之れを無くしちや再び世の中に立てません」毛「真逆に夫を無にするよふなことは万々ありや致しませんヅ……仮令へ失敗したに致しても……兎も角も觀客が惡く言ふが善く言ふが夫んな事を氣に掛け無いで舞臺で働いてさへ呉れりや遂には勝利を得るに極まつて居ります」森「エー〳〵左樣です外に何にも仔細はありません唯だ那の女が私の見込通りに遣つて呉れゝば勝利を得る万が一にも見込に違へば大失敗を招くと平たく言へば私を寢せるも私を起すも那の女の腕前一つに有るのです其事は勿論那の女も承知して居て呉れては居りませう

が何は貴方の口からも折があつたら仰有つて置いて下さいませ」と生島花子事、新女俳優和田光子は自分の性命を拾はれし恩人森賀重輔の為めに斯かる大任を身に負へるとは知るや知らずや或る日仲間の俳優毛利三幸より此趣きを聞き得て驚きの餘り呆然たるを三幸は巧みに慰めて毛「貴嬢夫んなに何も驚く事はあり升せんヨ此んな事といふものは氣に掛けて何うだろう斯うだろうと思つては迚も甘く遣れるものぢやあり升せんから平氣に成つてオヤ左樣ですかと言ふ位に考へて居て丁度宜いのです惡く言つたら厚皮とでも言ひ升せうか善く言へは膽力が据つて居無けりや不可け升せん」と諭せば花子の光子は頭を垂れし儘ま光「ヘイ元々妾しの性命を助けられ升した大恩人の事でムい升すから妾しの力に及び升す事は何んな苦しい

事でも致す考でムい升す」毛「貴孃が其決心なら屹度甘くお出來成さい升すヤア何事も森賀さんを助けると思つて允分は骨を折つて上げて下さい升せ」と諭し置いて立ち去りし毛利の後に花子の光子孃は堪へし涙の一時に決き來りてワッと其場に泣き沈み「光」妾しの身の成行を知らぬ人達ゆゑ些とも無理は無いけれども生れ故郷で散々人に乞食だ狂人だとまで賤まれた揚句に知ら無い他國にまで彷徨ふて自分に覺えもない女俳優の肩書を付けられ舞臺へ出されて大勢の前で此顏をまで曝さ無ければ成らぬかと思へバ此身を斫られるより尙は苦しい之れといふのも矢張り此世に初子や春雄さんが殘つて居る斗りに何時か巡り逢とも出來るだろう何時か自分の膝元へ引取て母子睦しく暮される時もあるだろうと思へバこそ那の時船から

遁られて此んな處へも來たのである何うぞ春雄さんも又初も妾しの心が通じたらバ此の後ち再會の時までは必らず無事で暮らして居て下さい定めし那の儘にして置いて發育院へは足を踏も致なかつたから初は乞食の子供と一所に成つて苦しい思ひを致て居るだろう首尾能く舞臺が踏み透せたら屹度お金を送つて遣るから何うぞ夫れまで辛棒して居て呉れ」と何蚊に付けては思ひ出して涙に咽ばぬ日も無かりし、斯くて今日明日と過ぐる中に花子が舞臺に顯はる可き豫定の開場日限にも迫りければ各新聞社の探報者は頻りに花子が許に尋ね來りて面會し技藝は未だ知る由無けれども其容貌の美麗なる事は一人りとして驚かぬも無く皆な特有の艶筆を揮つて花子の美貌を吹聽しければ世間の評判は沸くが如く愈々開場の當日には黃昏前

より觀客、群を成して詰め掛け來り日の全く暮れたる頃には左しも廣き劇塲なれども早や立錐の餘地無きに至りけり、坐元森賀重輔は此の盛んなる有樣を見て且つは喜び且つは悶へて森一之れまで屢々自分で演劇の興行も遣り又た話も聞いて居るが此んな景氣を取つたことは前代未聞だ唯だ此上は光子孃が何うぞ舞臺を甘く遣り透ふして喝采を博して吳れ度いものだと樂屋の彼方此方をウロ付きながら安き心も爲かりしが時刻も漸やく進んで今や序幕の明く可き相圖の鈴の音チリン〳〵！と響くと共に幕は靜かに左方に明きしが舞臺は一面に金銀珠玉を鏤ばめし貴族の客室にて侍婢と覺ぼしき二人の女、何やら秘密々々物語たりながら掃除を了つて奥に入れば軈て出で來りける一人こそ當狂言の主人公として觀客の最とも望を囑する

貴族の奥方にて花子の光子孃、此役に當りしが豫て傳はりし噂に違はず臺へ離あき光子の美くしさと共泣き腫らしたる目の中に千萬無量の愁を蓄へしは流石に母子永別の情を寫して眞に迫るの趣ありしに滿塲の觀客は思はず知らず喝采の聲を揚げて劇塲も爲めに崩るゝ斗りありしが漸やく佳境に入れるに及び二世を契りし本夫に棄てられ今や館を立ち去らんとするに當りて一子を前に引き寄せて永の暇を告ぐるの身振には滿塲爲に涙を絞りて泣かざるものゝ無かりしも道理、花子の爲めに此狂言は假りに姿を裝ふの演藝にあらずして心胸に迫り骨髓に徹したる吾が身の上を其儘に演せしなれば觀客をして限り無きの哀みを感せしめしは怪しき所爲にあらぬなり座元森賀重輔は此絶妙なる花子の演藝に涙と汗に面を潤はし森ア

「アヽ甘いもんだ此んな名人が私の手に這入るといふのは全く天の與に相違無い光子孃は實に全世界第一の、名優だ」と吾を忘れて喜び勇めるに引き替へて舞臺に上りし花子の光子孃は左無きだに初子が事、春雄が事の思ひ出でられ堪へ兼ねては忍び泣に涙に袖を濕うさぬ日も無かりしを現在前に一子を置き後に本夫を控へての愁嘆に其哀しみは骨も砕け心も狂ふ程なれば身体の疲労一方ならず二幕までは勤めしも三幕目に至りて、出で兼ねしを強ゆるは却つて後日の、不利益と毛利三幸は舞臺に出でゝ斯くと事情を物語れば數千の觀客が一同に遺憾々々と呼び立つる聲の裡に此夜は其儘に閉場を告げしが觀客の全く退場せし後ち森賀重輔が光子の室へ往かんとせし途中、光子の衣裳室より駈け出でし一人の女優が女「大變です光子孃が急病で攣き付け升した」と叫び立つる聲を聞きぬ、

第十三回

話次轉倒茲に惡黨糟谷勇次が花子の後を追つ掛けて河岸の邊に至りし時は花子は既に棧橋より身を躍らして水中に飛び込みし後なりしも熱念深き糟谷勇次は尚ほ此儘には諦めんとも爲ず續いて水中に躍り入り花子を抱き上げて助けんとは思ひしが宛かも河岸の一方より舟子熊吉の來かゝりたるに若し見咎められては後日の面倒と振り返りさま跡を暗まし「糟飛んだ邪魔もの奴が出て來やがつた」と呟やきながら元來し道を急ぎつゝ己が宿れるホテルを差して歸り來ぬ「糟返す〳〵も殘念な事を致た那れまでに漕ぎ付けて置いて取り逃がしたといふは何ういふ不運な事だろう此の熟練の腕を以て此神の如き才

智を抱いてサ業忌々しいと低聲に獨り愚痴を溢しつゝ河岸に通せる裏町を横町の方に曲らんとせし時、後追ひ來りし一人の巡査は角燈差し付けて聲を掛け巡「コラ〳〵少し待て……待てといふのに」と呼び留められて糟谷は驚き糟「ヘイ私ですカ」巡「知れた事ヨ外に人が居無ければ其方に極つて居るワ……今ま河岸端で大きい聲を揚げて怒鳴つて居たのは何であつたカ」糟谷は故らに不思議さうな顏色を裝ひ糟「何ですエ河岸端で……私は一向存じませんヨ」巡「夫でも其方は河岸端の方から來たでは無いカ」糟「ヘイ來ました如何にも河岸端の方角から來たには相違無いんです此の通り一筋道ですからナ、ケレども河岸端からは來ませんから夫んな大きい聲で何う斯ういふことは一向に存じ升せん」巡「存じんければ夫で宜いから往け」と巡査は河岸を

差して歩み往く、後に糟谷は小言を吐き糟「何だ篦棒な往けと言は無くつても乃公が勝手に往くワ」と言ひつゝホテルに立ち歸りて己が室に入り樂椅子に身を横たへて糟「アヽ〳〵折角の計略も水の泡と……併し此儘で泣き寢入るは糟谷の本分でないテ花子は死で終ふ野郎奴は那の通りと待て〳〵何う致ても茲に甘い謀略がない筈は無い一つ智惡袋を絞つて見れ升せう」と飽くまで圖太き惡黨勇次は頻りに彼此れ思考に暮れ居りしが差向き良案も浮ばざりしにや其夜は寢床に入り宵の疲勞に睏の際も高々と寢入りぬ、翌朝早く起き出でゝ又も惡計を考へ初めしが糟谷は元々財産ある身分にあらねば道ならぬ企圖にて得し多少の金も既に盡き今は倉林弥雄が花子の生活費にとて預け置きし金すらも殆んど使ひ盡して外くは剩さずなりけれ

ば如何に軍略に長けたればとて兵粮竭きては戰に勝たずと己が惡行に理屈を付けて何がな府内にて職業に有り就き己が一身を安樂に暮らすの巧夫を運らして後ち徐ろに花子が身に附ける財産を乘り取らんと佞奸邪智の惡黨丈けに少しく商業の道に通じ居るを幸ひ其後程無く或る商家に雇はれしが固より其腹の内に商業に全力を盡して他日の出世を祈らんなどの心無ければ不正の事のみ考へ企てゝ丁度一ヶ月斗りを送り來りぬ或る日の事心には最と苛繩しと思ひながらも己が一命を繋ぐ可き給金に對して手を束ねても居らねば不性無性に帳場に坐りて書類帳簿を捻ね探り居りしが不圖胸に浮び出し事のありて俄かに滿面に笑を含みて糟ウム左樣だ此んな甘い考へが何故最つと早く出無かつたかナ—自分ながら不思議に堪へ

ぬ現に那の子供は花子の實子で毋たる可き花子が死んだ以上は其財産を相續するに少しも不思議は無い立派に取れる那の子供さへ甘く手に入れば夫を玉に使つて財産を乃公の懷へ墜み込むのは無雜作な話だ何でも花子が變名して姓を土井と言い立てゝ警察から病院を通ふて居るから子供も屹度其姓を名乘つて居るに違ひ無い何は兎もあれ養育院の書記に就いて一と通りの樣子を探つて見よふと糟谷は即日所用に托して外出し足を急がして養育院に至り書記池田甚太郎に面會して花子が預けし子供の事を尋ねしに池田は糟谷の內心に斯る不敵の惡計を廻せりとは夢にも知る由あらざれば斯々云々の事情に依り舟子飛田熊吉に引取れて今ま同人の宅に在りと隱さず事實を物語りしに夫さへ聞けば他に用無しと糟谷は厚く禮を述

べて其儘に別れ帰らんとするを池田は姑しと引き留めて池「貴方は其お力と申す子供の母親を御存じなんでムいますカ」と問はれて糟谷も餘儀無く踏み留り糟「エー〳〵存じて居ります」と も能く知つて居り升す」池「デは那の婦人は貴方の何か御親類ででもお在り成さるんですカ」糟「左様でムいます親類と申して丁度義理の兄弟に當ります」池田は少しく驚きし面色池「ハア左様でムいますカ一向に存じ無いで失禮を申しましたが何うやら聞けバ死去りだとか申す事で定めし御愁傷でムい升せう」糟「ヘイ有り難う存じ升すツイ外に親類のものと言つても無いものでムい升すからマア私が一人で責めては後へ殘つた子供でも育てゝ遣升したら死んだものも安心し升せうと存じて……」池「大きに御道理でムい升す同し事でも貴方が育てゝお上げ成

さりや子供衆の爲めにも又た死去つた方の爲にも宜うムい升すからチ」糟「私も左様存じ升して今日態々御邪魔に出升した次第でムい升す」と口から出任せ出放題に心にもなき親切を飾つて池田を欺しが池田も斯る事柄に深く關係す可き役目にあらねバ唯だ一と通りの事實を告げ又た語るを聞いて其日は糟谷を立ち歸らしめぬ、糟谷は養育院の門を出づるや浮き持つ足の後ろめたく後振り返り〳〵若しや吾が跡を附け來らずやと心配しつゝ胸の中には喜び勇む増らしさ糟「先づ安心斯う致て置けバ最う此方のものだ養育院の書記なんといふものは馬鹿なもんだナ乃公が花子の兄弟だといへバ弔詞を言やがる間抜けめがへゝゝ夫れは左様と子供は最う一時熊吉といふ野郎に養はせて置から今ま引取つてる乃公が少々困るからイザと言へバ

用捨無く引つ連れて來るんだから居るとさへ極りや何處も同じ事だ――アー／＼散々苦ませやアがつたが何うやら今度は勇次のものに成りさうだワイ」と獨り言ちつゝ己が家へ差して歸り入りしぞ大膽なる、

第十四回

龍動の劇場にては花子の光子孃が急病に倒れたりとの報知に坐元森賀重輔の驚きは言ふにや及ぶ此叫び聲の耳に入るより毛利三幸も驚き周章て自分の室より飛び出でんとする出逢頭に森賀に突き當り毛「オー森賀さんか光子孃は何う致たんです」森「毛利さんか折角私は光子孃の室へ往かうと思つて其處まで來掛ると今の聲で……………マア一所に來て下さい樣子を見るから」と二人り連れ立ちて光子孃の衣裳室に入り來れば孃は一人の

腕を枕にして横に打ち倒れ舞臺の衣裳を着けし儘まに三四人の女優共周圍を取り卷き皆な顔色をも失ひて狼狽し居る体に森賀も夫を見て刄に胸を突かれし如き心地のせしが態と沈着いたる面色にて森「夫んなに騒いぢや却つて宜く無いでせう夫りや女に能くある癪ですから心配するにや當り升せん今夜の初舞臺で氣が張つたから酷く疲勞が出て來たんでせう」と言へども女優は聞き入れず女「イーエ光子さんは死に升す之れが何う致て騒が無いで居られ升すか」森「大丈夫です心配する事はあり升せん毛利さん憚りさまですが一寸醫者を呼び寄せる手順を運んで下さい升せんか」と言はれて毛利三幸は名優光子の危急に心も半ば顛倒し居れば舞臺の衣裳を着けたる儘ま室を飛び出して自身に醫師の居宅に駈け付けしに往來の男女子供等

れ共異樣の打扮に氣色を變へて走るを見て皆な立ち留りなが
ら甲「那りや何んだ人間かエ」乙「狂人だ〳〵」と思ひ〳〵に評し合
へり俳優三幸ハ斯る詞の耳にだも入らず若し機會を誤りなバ
可惜名優を失ふ可けれバと夫れのみ心に掛りて餘念も無く醫
師を急がして伴ひ歸りぬ醫師ハ靜かに室に入り來りて打ち倒
れたる病人の樣子を眺め周章てゝハ手を付けざりしを傍なる
森賀重輔そ心も心ならねバ醫師に向つて森「何うでムい升せう
貴方の御見込みは」と言はれて醫師は病人を診察し森「之りや尋
常の癪とハ少し種類が違ひ升す殊に少々〳〵手後れに成つて御覽
の通り目ハ固より舌まで攣き付けて居升すから」森「御療治に
掛り升せうカ」醫「夫りや掛り升す充分見込はあり升すが少し永
びくかも知れ升せん」と言ひつゝ取出せしは餘程の劇藥と見へ

二三滴を洋盃に落して水に和し喰ひ切りし病人の齒をコヂ明
けて喉に注ぎしが藥ハ難無く腹に落付きぬ醫「ア此藥が喉を通
る位なら決して御心配にハ及び升せん森賀ハ初めて少しく顏
色を取り返し森「ヘ左樣でムい升すカ共れ藥が喉を通れバ必ら
ず助かるのでムい升すナ」醫「夫りや御心配に及び升せん何しろ
何處か靜かな處へ置いて充分看病に注意せんけりや成り升せ
んが御病人のお宅ハ何方ですか」森「モー直き此四五間先のホテ
ルでムいます」醫「夫れではお宅へお連れ申した方が宜うムいま
す」森「今ま動かして構ひませんカ」森「仔細あり升せん」と醫師の指
圖に森賀は幸ひ自分の馬車の劇場の裏口に廻り居ればとて靜
かに病人を連れ出して之れに打ち乘せ年長の女優にして平素
親切の聞えあるもの二人を撰んで看病人と爲し自分も共に醫

師に付き添ふてホテルの一室に病人を移しぬ、此時病人は劇藥の効驗現はれしにや今まで虫の息斗りなりし呼吸も漸次に高まり痙攣の爲めに惣身石の如く固まり居りしも柔らいで稍や輕快に赴きし容躰なるに森賀は頗ぶる安堵して森「何うか御蔭さまで癪も治つたよふで厶いまして大きに安心致しました外の病氣とは違いまして婦人の持前で厶いますから治るものが治りさへすりや何處が惡いといふでも無し樣子次第では明晩から舞臺へ出るよふに成れませうナ」森「夫りや飛んでも無いお話です癪といふものは元と神經から來るもので強く來た後は非常な大病を惹起すことのあるものです假令へ全快致して身体が平常の如く成つてからも迂濶に舞臺などへ出れば再び後戻り致します私の考では先づ少くも一ヶ月間は當人の心任せに致して置いて舞臺へ出しては不可ません」と聞いて森賀は又も顔色無く其身不運にして數度の興行に數萬の損毛を來し今まや漸くにして光子孃の吾が手に入り世間もワツと評判立ちて其損毛も一擧に回復せられん見込の立ちし今日、初日の興行を半ばに終りて爾後一ヶ月間も閉場しなば人の惡評は言ふも更なり再び開場する時あるも此盛んなる人氣を取り回すこと容易の業にあらず殊に森賀の内心には疾くより光子孃に思を焦せる事のありて利慾の外にも光子の病氣は深く其胸を惱めし樣子ありしが其中病人も段々癪の治りて快よく眠りに就きし容躰を窺ひ醫師は看病人なる二人の女優に篤と病人の手當を諭して森賀に向ひ醫「病人も好い鹽梅に眠れた樣子ですから後刻までにお人を下されば藥を差上げます今晩の處は極く靜か